地域における社会関係資本に関する研究
—太子堂・船橋地区の事例から—

小山　弘美 *

１．問題

1.1　これまでの調査結果

これまで、せたがや自治政策研究所では 5 年間にわたり世田谷区民の「住民力」に関する調査・分析を行ってきた。本研究における「住民力」とは、地域社会の形成に主体的に参加するための住民自身が保有するソフトな資源のことをさし、行政と対等に公共的領域に対して責任をもち、意思決定過程に参画しうる住民の力量をあらわすものである。住民力は以下の 3 つの要素から構成される。パーソナル・ネットワーク（親密なネットワークおよび橋渡しネットワーク）、互酬性（支援期待度および地域参加度）、信頼（町内信頼度）である。これらを合成した住民力得点についての分析、および住民力にかかわる地域の事例調査から、これまでの調査結果を以下のようにまとめることができる[1]。

（1）住民力は男性より女性のほうが高く、性別年代別で特徴が異なっている。また、住民力と個人属性の関係では、子どもがいる人、居住年数の長い人の住民力が高い。

（2）住民力はコミュニティ・モラール（地域への愛着心・参加意欲）、投票行動、住民解決志向に対し正の影響を与えている。

（3）世田谷区の出張所・まちづくりセンター別 27 地区の住民力の平均値に有意な差が見られた。地区別の住民力と国勢調査データから得た地域特性との関連を見ると、男性では、老年人口比率、戸建率、上級ホワイトカラー比率と正の相関を示し、女性では年少人口比率と弱い正の相関が見られた。

（4）住民力にとって不利な属性の人でも、住民力が高い地区に住む人の住民力が、低い地区に住む人よりも高くなっている傾向がみられ、住民力の集合的効果が確認された。

（5）住民力を高めるためには、地域参加度を高めることが一つの手立てとなるが、その場合「子どもを通じて育まれる地域のつながり」、「町会・自治会をはじめとする地域活動」が重要となる。

（6）住民力が高い地区の事例調査では、PTA を通じて地域に若い世代が自然と参加する仕組みや、地域におけるゆるやかなつながりを保てる環境が見られ、地域のつながりの新しい形態の萌芽が確認できた。

---

* せたがや自治政策研究所特別研究員

1 （1）から（5）は、2009 年に 20 歳以上 75 歳未満の世田谷区民を対象に、10,000 名を無作為抽出して行った「地域の生活課題と住民力に関する調査'09」データより分析を行った結果である。（6）は（1）から（5）の知見をふまえて、事例調査を行った結果である。詳しくは『せたがや自治政策』vol.2、3、4 を参照。

1.2　問題の所在

上記で確認したように、これまでの住民力調査では、住民力に対する地区の集合効果を確認し、住民力が高い地区の組織や活動について事例分析を行ってきた。本稿では、住民力に対して集合効果を及ぼす「地域が保有するソフトな資源」について、具体的に掘り下げて検討していきたい。

ある人が住民力の高い地区に引っ越した場合、上述の（4）の知見をふまえれば、その人の住民力が高くなる可能性がある。このようなことがおこる原因として、まず考えられるのは、個人に対する個人からの影響である。住民力が高い人は人とよく接する人であり、住民力が高い人が多い地区では、新しく引っ越してきた人に対して、個々人がコミュニケーションをとるのかもしれない。

もう一つ考えられるのは、地域レベルの影響である。例えば、A さんが引っ越してきた地域にはさまざまなサークルやクラブが存在し、趣味にあった会を見つけて参加するようになるかもしれない。子どもがいる B さんは、子どもの見守りをさかんに行っている地域に引っ越して来て、子どもを一人で安全に外に出すことができるようになり、そのような活動に自分も参加するようになるかもしれない。単身高齢者である C さんは、高齢者の茶話会がさかんな地域に引っ越してきたとたんに、何度も参加を促されるかもしれない。このような地域の特徴が、地域の中のコミュニケーションを促進し、地域の中にいる個人の住民力を押し上げると同時に、新しく引っ越してきた人にも影響を及ぼす可能性がある。

この二つの考え方は、住民力の考え方のもととなっている社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）論において、社会関係資本を個人財と捉えるか、集合財と捉えるかの立場の違いに通じるものである。個人財と捉える場合には、住民力の高い人びとが直接 A さんに働きかけを行い、A さんの住民力が上がることを想定している。集合財と捉える場合には、地域全体が持っている集合的な資源が、地域に住む人々の住民力を押し上げ、A さんの住民力も押し上げていることを想定している。実際の事象としては、どちらの効果も同時に存在し、A さんの住民力が高まると考えることもできる。

本稿では、集合財としての社会関係資本について検討するために、まずは「地域レベルの社会関係資本」を想定し、これを個人の住民力指標とは異なる形でどのように捉えるべきであるのか考察する[2]。地域の事例に即しながら、個人の住民力とは独立に存在している、地域の社会関係資本とはどのような事象であるのか、また測定を試みる際にはどのような点を考慮すべきであるか検討していく。

２．地域の社会関係資本

2.1　地域の社会関係資本の位置づけ

せたがや自治政策研究所の所長である森岡清志は、「住民力は、『地域力』の一部であっ

---

[2] これは、社会を単なる個人の総和ではないとした E.Durkheim の命題にそうものである（Durkheim 1960＝1985）。

て、地域空間内部に存在する資源の総体を地域力と呼び、地域力の一部としてのソフトなパワー、関係と参与にかかわる資源を住民力と呼ぶ（森岡 2010：3)」としている。森岡のいう「住民力」とは、本稿が対象とする地域レベルの社会関係資本を含むものであろうが、住民力の調査研究上操作的に、個人が保有するソフトな資源を「住民力」と呼ぶようになったと考えられる。ここで「地域力」とは、「地域社会が自らを主体的に形成する力」であり、具体的には、「地域社会をよりよい生活の場にする力」「地域の課題を自ら解決に導く力」としておこう。地域力を構成する「地域空間内部に存在する資源」とは、吉田民人（1974）の資源論の分類を援用し、「物的資本」、「人的資本」、「社会関係的資本」の 3 つの資本が含まれると考えることができる [3]。「物的資本」とは地域に存在するハードな資源であり、大きな公園、整備された道路、集会場などを指し、自然環境もこれに含まれるだろう。「人的資本」とは、そもそも個人の収入を高めるための学歴などを指すが、ここでは、地域にとっての人的資本を考える。学歴が高い人も地域にとってプラスになるような知識を持っていればこれにあたるだろうが、剣玉がうまいとか、みんなをまとめる能力に長けているとか、そういう人材も地域にとっては人的資本にあたるものと考えることができる。「社会関係的資本」は R.D.Putnam と同様に、「ネットワーク」、「互酬性の規範」、「信頼」から構成されるものとここではしておこう（Putnam 1993＝2001:206)。個人が持つ社会関係資本を測定したものが、これまで調査分析を行ってきた「住民力」である。一方、社会関係資本における集合財としての性質を持つもの、つまり地域の社会関係資本が本稿の研究対象となる。

社会関係資本を地域の集合財として扱った Putnam（Putnam 1993＝2001）は、その特徴として、(1）好循環と悪循環、(2）他の社会的諸活動の副産物であること、(3）経路依存性をあげている。また、「水平的な市民参加のネットワーク」を社会関係資本の本質的な形態一つとしている。これらを本稿が対象とする地域の社会関係資本に読みかえるならば、次のような特性を持つ可能性を指摘できる。(1）地域の社会的活動は、社会関係資本の本質的な形態の一つであり、このような活動自体も地域の社会関係資本を増加させる。(2）社会関係資本が醸成されている地域ではより醸成され、減退している地域ではより減退する。(3）現在の形態は地域の歴史や地域社会の経験の蓄積により形成される。次項では、これまでどのように地域の社会関係資本を測定してきたのか、概観することにしよう。

2.2 地域の社会関係資本を測定する試み

社会関係資本を集合財と捉えている J.S.Coleman（1988=2006）は、カトリック系の高校に通う高校生の中退率が公立校や他の私立校よりも低いことから、学校を取り巻くコミュニティの社会関係資本が中退を押しとどめる機能を果たしていると指摘した。カトリック系の高校は宗教組織を基盤にして、生徒の家族が多重的関係に基づいた閉鎖的コミュニティを形成しているためである。しかし、カトリック系の高校のほうが他の高校よりも社

---

[3] 「情報的資源」を最上位におく吉田（1974）の立場とは異なる。

会関係資本として具体的に何が豊富であるのかを示してはいない。

このコミュニティ水準の社会関係資本を具体的に指標化したのは、Putnam（2000=2006）である。Putnam は、アメリカにおける各州の社会関係資本の差異を明らかにするために、グループの所属、地域組織・ボランティア労働への参加、友人との社交、社会的信頼、投票参加、非営利組織・市民組織の発生率等を指標として用いた。特徴的なのは、個人に対する調査から得られた結果と、人口当たりの組織数といった地域の特性を表す指標を合成していることである。

Putnam の研究が発表されて以降、地域の社会関係資本を測定する試みが多数行われてきた。その際、個人レベルの変数の要約を用いるべきか、または地域レベルの変数を用いるべきかについては、多くの議論がなされてきた。J.W.Van Deth は、二つの社会関係資本概念を区別することが重要であると主張する（Van Deth 2003: 84）。地域レベルの指標を使用することに反対する論者は、地域に居住する人の属性による影響を取り除くことが難しいことをあげている（Kawachi et al. eds. 2008=2008：87）。この点で、個人レベルの指標では、マルチレベル分析などが手軽にできるようになってきたことから、個人の特性を超えた地域効果の検証が可能になってきたことが指摘できる。一方で、K.Lochner 他は、地域社会でじかに観察できる指標（例えば、大雪の直後に歩道が地域住民により除雪されているか否かといった）のほうが、地域レベルの社会関係資本の変数としては、より適切であると述べている（Lochner et al. 1999、埴淵他 2008：59）。地域レベルの指標としては、労働組合員数、ボランティア組織数、ボランティアの割合、献血者数、投票者数、慈善団体への寄付数、犯罪率などが提案されている（Harpham et al.,2002）。しかしながら、これらの指標を日本の地域にそのまま当てはめるには、違和感を覚えるであろう。地域レベルの社会関係資本の指標を使用する際には、調査対象地域の文化的な特異性を考慮しなければならないということである。また、指標が社会関係資本を代替しているのか、その結果（被説明変数）であるのかという点にも注意が必要である。とはいえ、地域の社会関係資本が社会的な相互関係によって成り立つものと考えれば、個人レベルの指標の要約では不十分であり、地域レベルの指標を考察することは有用である。

では、日本の地域を対象とする場合、どのような指標を用いればよいのだろうか。辻中豊他（2009）は、近年注目されている人びとのつながりや連帯を築く上で期待される組織として、町内会・自治会 [4]組織や、NPO の研究を行っている。実際に、町内会・自治会は多くの地域住民の加入からなり、地域住民の生活に必要な社会サービスを供給し、連帯を醸成する役割を担っており、地域の社会関係資本を醸成する役割を果たしていると捉えることができる。辻中他は、町内会・自治会における社会関係資本の測定において、まずはその代替値として加入率をあげ、加入率の低下を社会関係資本の衰退と捉えている。また、

[4] 辻中他（2009）では自治会とされているが、本稿では、町内会や自治会などの地縁組織を「町内会・自治会」の名称に統一して使用する。ただし、事例の部分では「町会」などインタビューで当事者が使用していた名称を使用する。

地域における住民のつきあいの程度、住民関係の円滑さ、地域活動の活発さ、町内会・自治会活動への参加率から社会関係資本指数を作成している[5]。これは、町内会・自治会長からみた地域における住民同士のつきあいと活動への参加の程度を表すもので、地域レベルの社会関係資本を測定した一例である。ここでは、社会関係資本指数は、親睦活動の多さや、活動施設の確保と正の関連を持っていることが指摘されている。

和田清美他（2010）は、東京都世田谷区・墨田区・八王子市の自治会長を対象にネットワークや活動について聞いた調査の結果から､他組織との交流が多い町内会･自治会はNPOとの交流も多く、活動量や会長の知人ネットワークも多いことを明らかにしている。このような町内会・自治会の特徴は、範域が広く、加入世帯数が多く、結成からの年数が長いと分析している。

これらの結果から、辻中他と同様に地域レベルの住民同士のつきあいや地域活動への参加の程度を地域の社会関係資本とするなら、地域の社会関係資本は、地域の活動の多さや、施設、組織の多さ、ネットワーク数、参加者数、活動や組織の蓄積年数などと関連を持っているものと考えることができる。2.1 で示した地域の社会関係資本の特性を測定するにも適した指標であると考えられる。

以上の結果から考えると、地域の集合的社会関係資本を捉えるためには、まず、地域内に存在する組織に注目し、それらに参加する人びとの量や、それら組織がどのような活動を行っているか、またどのくらいの期間存在してきたかなどが、重要であると考えられる。これらの点に注意しながら、地域内のさまざまな団体・活動の事例を見ることにより、より詳細な点について考察していきたい。

３．方法と地域の選定

これまで調査分析を行ってきた住民力とは独立して存在する変数として、地域の社会関係資本を捉えるために、地区別住民力得点にとって不利な地域特性を持つ地区をその対象とすることにしたい。そのような地域でも地域効果が見えるのであれば、住民力とは異なる地域の社会関係資本をより確かなものとして確認できるだろう。上述の 1.1（3）により、地区別住民力は老年人口比率、戸建率、上級ホワイトカラー率、年少人口比率と正の相関関係にあることがわかっている。そこで、都心に近く都市化の進んだ地域である太子堂地区と近年大型マンションの建設など人口増加の激しい船橋地区をその対象とする[6]。

太子堂地区は人口 23,517 人で、人口密度や人口流出入率が区内で 2 番目に高く、都市化の激しい地区である。また、年少人口比率が 7.5%、戸建率が 21.3%とともに区内 3 番目に低く、単独世帯率が 64.4%と区内で一番高くなっている。地区内に三軒茶屋駅があり、渋

---

[5] 具体的には、住民のつきあい、新旧住民の交流の円滑さ、世代間交流の円滑さ、活動への参加の円滑さ、総会への参加率、祭りへの参加率を加算している。辻中他（2009）が作成した社会関係資本の指標は自治会長個人から見た地域レベルの社会関係資本を測定していること、また、認知的な指標に偏っていることには注意を要する。

[6] ここで扱う地域特性の数値の詳細は、本報告書 228 - 241 頁参照。

谷など都心に近いが、狭い路地が入り組み、世田谷の下町と呼ばれる地区である。一方、船橋地区は人口 35,224 人で、老年人口比率が 16.6%と区内で 2 番目に低く、年少人口比率が 14.5%で 2 番目に高い地区である。戸建率が 20.6%で区内 2 番目に低く、核家族世帯率が 55.2%で 2 番目に高い特徴をもち､集合住宅に住む核家族世帯が多い地区となっている。以上のように、両地区とも住民力にとっては不利な特徴を持つ地区であるが、その特徴はまったく異なっている。

団体や活動については、太子堂出張所、船橋まちづくりセンターの職員から特徴ある活動を紹介してもらい、太子堂地区の場合は、さらに関係のある団体や活動の代表者などに聞き取りを行った。そのうえで、行事に参加させてもらうなどして、活動の状況を把握した。ヒアリングの内容および行事参加のルポルタージュは本稿後半の資料編に記載した。

４．太子堂地区

太子堂地区は三軒茶屋 1 丁目、太子堂 1 ～5 丁目からなる区域であり、木造密集地域を含むことから 1980 年頃に防災まちづくりのモデル地区に指定され、街づくり条例に基づき、住民参加型の修繕型まちづくりを行ってきた。一方で三軒茶屋駅周辺では 1990 年代にキャロットタワー建設による再開発を経験しており、さまざまな顔を持っている。町会を中心とした防災や防犯活動においてもモデル地区になるなど、地域活動も活発な地区である。

4.1　太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会

太子堂 2・3 丁目地区は、1979 年の世田谷区基本計画において、住民参加型の防災まちづくりのモデル地区に指定された。これを受けて、1980 年から 1 年半の間に区主催のまちづくり懇談会が計 7 回行われた。はじめは区に対し不信感があった住民だが、区の誠実な姿勢に接するうちに、住民が主体的にまちづくりを継続していく機運が高まっていった。その後、1982 年に制定された世田谷区街づくり条例に基づき、まちづくり協議会を発足させて、現在まで修繕型まちづくりに取り組んできた。地区まちづくり計画や、地区計画についての提案を行う等ハードの街づくりを行うとともに、ソフトなまちづくりについてもワークショップの手法を用いるなど、先進的に取り組んできた。

参加者については、「自由に誰もが参加できる協議会」という考え方で、太子堂地区および周辺の関係者はもちろん、地区外居住であってもオブザーバーとして参加できるとした。そのため、当初から 60 名の参加を得た。現在は、主に活動を行っている 6 人が運営委員となっており、会員は 60 名いるが、毎月 1 回の会合に運営委員のほかは数人が出席するのみである。協議会では、メンバーが全員一致した内容のみ採択することにし、さらに、権利にかかわる場合には住民全員に告知するようにしている。フラットな組織にするため、規約上は存在する会長、副会長を現在は置いていない。当初、会長を地区の連合町会長にお願いしたが、断られたという。住民が対立する可能性をはらんだ、道路拡幅などハード面の調整を行う協議会に町会組織がなじまないことから、個人としては協力できても、組織としては連携することはできないとの考えであった。

行政からの働きかけをきっかけとしてできた組織であることもあり、行政との関係は密接である。1984 年 4 月には街づくり条例に位置づけられている「街づくり推進地区」に指定され、同年 10 月に「認定協議会」に指定された。1995 年の世田谷区街づくり条例改正によって、現在は任意団体となっているが、毎月の協議会には必ず行政職員が出席している。街づくり条例に基づいた専門家派遣制度を活用し、専門家が長く協議会にかかわってきたことも大きな成果をもたらしてきた。

発足からすでに 30 年を迎える協議会において、長年にわたり行政職員や専門家と話し合いを重ねてきたことから、中心メンバーは大変な知識量を持っている。そこで、運営委員と会員との知識や意識のギャップが生まれ、それが課題となる。一般の会員に合わせれば話が進まず、中心メンバーに合わせれば話についていけないため、新しい人が参加しづらいというジレンマとなる。このような状況が参加者を選別し、固定化・高齢化を招いてしまう。次世代への引継ぎが課題であるが、若い世代は忙しく、まちづくりに時間が割けないこともあり、解決策が見えない状況である。

ハードの整備が活動の中心ではあるが、活動理念においてもソフトを含めた総合的なまちづくりを当初から掲げてきた。他団体と協働することによって、ワークショップなどの手法を使用・開発しながらイベント等のまちづくり活動を行ってきており、これらの活動が地域コミュニティに与える影響も大きい。以下に具体的な事例を紹介する。

きつねまつり

1983 年、まちづくりに対する関心を高めることを目的に協議会が主催して行った「太子堂を歩こう会」や「オリエンテーリング大会」が好評だったことから、次年度より「太子堂きつねまつり」を催すようになった。協議会だけでなく地区内の多くの活動団体にも呼びかけて「きつねまつり実行委員会」を組織し、地区外の人々も含めて多くの個人やグループの参加を得て、1995 年まで続いた。まちを点検する「歩こう会」や、子どもを中心にクイズに答えながらまちを発見する「オリエンテーリング」のほか、毎年さまざまな企画が行われた（太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会 2005）。

初年度の「太子堂を歩こう会」や「オリエンテーリング」は、当時「三世代遊び場マップ」を完成させ、太子堂でプレイパークを行う活動などに参加していた「子どもの遊びと街研究会」のメンバーがまちづくり協議会にオブザーバーとして出席しており、提案したことがきっかけとなった。きつねまつりが毎年開催されるようになってからも、子どもの遊びと街研究会が午後の太子堂オリエンテーリングを企画、担当していた（子どもの遊びと街研究会 1991）。

トンボ広場

太子堂のまちづくりの特徴の一つとして、ポケットパークの整備がある。道路拡張のために取得した土地がそのまま未利用地になってしまわないよう、住民の発意により、花壇などを整備している。ポケットパークは大きな広場や公園のない太子堂 2・3 丁目地区にとっては延焼緩衝帯ともなる。これらポケットパークの整備の際にもワークショップ等を行

い、地区内外の参加者のアイディアを取り入れ、それぞれ特徴の異なるユニークな広場となっている。

その第 1 号がトンボ広場である。トンボ広場は太子堂 2 丁目の防災用地（165 ㎡）で、区がタイル貼りにしようとしたところを「子どもの遊びと街研究会」のメンバーを中心に反対し、「土の庭」にすることを提案した。まちづくり協議会を通して近隣住民に呼びかけて話し合いの場を持ったところ、隣に住む Y さんを会長とする「トンボ広場を育てる会」が発足した（子どもの遊びと街研究会 1991）。植えるシンボルツリーなども話し合で決め、整備も業者に任せるのではなく、竹垣づくりも住民が行った。トンボ広場オープニングイベントも行い、年末のもちつきを行うなどコミュニティに愛される広場となっている。

トンボ広場は三軒茶屋の駅にも近く、手入れを怠れば、放置自転車やごみのポイ捨てなどですぐに汚れてしまう場所にあるが、Y さんが常に注意してきたおかげで、きれいなまま保たれてきた。まちづくりはきれいごとではなく、こういう地道な活動の積み重ねである。

楽働クラブ

太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会では、防災まちづくりの活動ばかりでなく、より生活に即したテーマでまちづくりを考えようと、1990 年から、ワークショップ形式でさまざまなテーマに取り組んできた。隣の三宿 1 丁目地区まちづくり協議会と共催で実行委員会をつくり、高齢社会や環境などをテーマに、地区外の人々や専門家を交えて話し合い、アイディアを出し合った。初年度には「老後も住みつづけられるまちづくり」という高齢化社会をテーマとし、区の広報の呼びかけで集まった 70 名が参加した。6 つのテーマに分かれてワークショップを行い、成果を班ごとに発表した。「会う高齢者がみんな元気で、いろんな知識を持っていたから、それを生かせないか」という大学生の発案をうけ、花を植えて街を美しくする活動を行う「楽働クラブ」が発足した。

楽働クラブは発足時 6 名程度の参加であったが、現在は 25 人が所属し、5 つの公園の管理を行っている。花壇の整備などをしていると、「ご苦労さま」など自然と近隣の人が声をかけ、参加するようになる。さらに、参加者の中から、自分の近隣で始める人も現れ、他地区への広がりも見られる。また、緑道の花植え活動を、三宿小学校の先生が見て、子どもたちに花植えを教えてくれないかということになり、三宿小の 1 年生に毎年緑道で花植えを教えている。その活動のあと、小学校に招待されて、一緒に給食を食べるといった交流も生まれている。

4.2 遊びとまち研究会

遊びとまち研究会は、2003 年の池尻児童館 40 周年をきっかけに、子どもの遊びを通してまちのあり方を考えようと集まった人たちで 2004 年に立ち上げた研究会である。子どもの遊びの減少、遊びにくいまちの環境の現状に対し、子どもの視点からまちのあり方を考え、よりよくしていくことを目的とし定期的に研究会を行っている。当初は、四世代目の遊び場マップの作成が主な活動であった。1980 年代に太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会

と一緒にイベントなどを行っていた「子どもの遊びと街研究会」が 1983 年に太子堂で「三世代遊び場マップ」を完成させており、その成果を継ぐ活動である。「子どもの遊びと街研究会」自体は 1989 年ごろに活動を休止しており、新しくできた「遊びとまち研究会」の両方にかかわっているのは 2 人程度である。四世代遊び場マップ作成には、大学の研究者や、太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会の運営委員、池尻児童館の職員、世田谷プレーパークのプレーリーダーなどがかかわり、多聞小 PTA や、大学生、大学院生も多く参加した。

発足から 5 年の歳月をかけ 2009 年に完成した四世代遊び場マップは、池尻児童館管轄の四つの小学校区を対象にして作成された。太子堂地域では、三世代遊び場マップがすでにできているので、四世代目のみを作成した。三世代遊び場マップのインタビューを受けた当時の子どもが親の世代になっており、その子どもが参加したケースもあった。そのほかの地域については、現在の子どもたちだけでなく、第一世代から第三世代の昔の遊び場も聞き取った。メンバーを 4 つにわけ、地域ごとにチームでインタビューを行なった。池尻地域では、「遊び見つけ隊」をつくり、実際に遊んでいる様子を見て、マップにまとめた。

四世代遊び場マップ作成以外の活動には、以下のようなものがある。三宿の「たぬきのポンポ公園」を造る際に、子どもたちが参加してデザイン等を提案した「プロジェクト T」のプロセスが海外でも話題となり、プロジェクト T および遊びとまち研究会が GUIC Japan として認定を受け[7]、2006 年「GUIC＋10 in Canada」に参加し、カナダでプレゼンテーションを行った。児童館のキャンプを手伝うなど、積極的にボランティア活動をしている高校生グループの T&I リーダーチームが活動に参加するようになり、2009 年に彼らが「せたがやクエスト」というイベントを企画して開催した。2008 年のエコシティせたがやコンクールでは、T&I リーダーチームと「遊び見つけ隊」の小学生グループが、それぞれ入賞した。

三宿の「あそびの会」という幼稚園出身の子どもたちが、太子堂地域の四世代目の遊び場調査でよいインフォーマントとなったが、その母親たちが、2012 年に取り組んでいる「せんたプロジェクト」の中心メンバーになっている。この太子堂の母親たちとは、完成したマップを、太子堂小で行っているふれあいまつりで配った際や、太子堂ワークショップの講座に協力した際などに顔を合わせるうちに交流が始まった。研究会としては、地域の中でどうやって継続していけるかが活動の課題であるが、この太子堂の母親たちとの出会いが今後につながる。

せんたプロジェクト

2012 年度にまちづくりファンド災害対策・復興まちづくり部門の助成金を獲得し、「せんたプロジェクト」を行っている。被災地での遊び場マップを作成し、遊び場や遊びを通した復興地支援を行うとともに、世田谷のまちづくりに対しては、災害復興および対策に関する知識、経験、成果を還元することを目的とする。具体的には、仙台の子どもたちを太

---

[7] GUIC（Growing Up In Cities）は世界各地で展開されている「若者・子どもの参画」を推進し、アクション・リサーチを通して環境改善をすすめる活動（吉永他 2009）。

子堂に呼び、世田谷の子どもとともにまちづくりを体験してもらう活動と、研究会メンバーが仙台に行き、遊び場のヒアリングを行い、遊び場マップを作成する活動を行った。きっかけは、2011 年の年末や 2012 年の年始に仙台の遊び場の活動をしている人たちと交流し、被災地には外からの支援が今必要であるという話を聞き、ファンドの助成を受けて支援活動を行うことになった。

仙台の子どもたちが世田谷に来た際には、太子堂小の母親たちの発想で、太子堂サバイバルキャンプに参加してもらった。学校との調整は現役 PTA が中心になってまとめた。世田谷からメンバーが仙台に行った際には、仮設住宅でのヒアリングを行い、昔の遊びの話をたくさん聞いてきた。仙台市六郷地区、七郷地区の今と昔の遊び場、震災前後の変化を記したマップを作成し、宮城県新しい公共の場づくりのためのモデル事業 「学習会『あたらしい街』づくりにおける子どもの視点」にて配布予定である。

4.3 協働の場となるイベント

太子堂地区では、上述のような任意団体と町内会・自治会のような伝統的地域組織とが交流するような「協働の場」となるイベントが多数開催されていた。以下にそのうちの 3 つを紹介する。

4.3.1 太子堂サバイバルキャンプ

太子堂サバイバルキャンプは、2012 年夏で 15 回目を迎えた、小中学生を対象とした避難所宿泊体験の場である。中学生の活躍の場をつくる目的で、宿泊で避難所体験をやろうということから 15 年前に始まった。実行委員会方式で行われており、実行委員会には、学区内の町会、青少年地区委員会、消防団などの地域の団体、PTA など学校関連の団体などが参加している。小学校、中学校を隔年で会場にして行っているが、毎年参加しているベテランの児童生徒もいる。

2012 年は「遊びとまち研究会」の企画で仙台からきた子どもたちも一緒に参加し、実際に仙台で被災した子どもたちと交流しながら行った。遊びとまち研究会には太子堂小中学校の保護者がかかわっているため、仙台の子どもたちを世田谷に呼ぶツアーの中に、太子堂サバイバルキャンプ参加を盛り込んだのである。

太子堂サバイバルキャンプにおいて、学校避難所長の役割を担う太子堂 5 丁目町会の会長は、町会と他の団体とのネットワークについての質問で、「青少年地区委員会、身近なまちづくり、社協、ごみリサイクルなどは町会長として役割も担っているが、市民活動団体とは特に交流はなく、まちづくり協議会もあまりかかわりがない」と答えていた。しかし、サバイバルキャンプを通して、このように「遊びとまち研究会」の活動とかかわりを持っており、まちづくり協議会の理事もサバイバルキャンプに顔を見せていた。町会と市民活動団体とでは、組織同士のフォーマルな交流はないのかもしれないが、まったく交流がないということではなく、活動や、個人を通してゆるやかにつながっているのである。

4.3.2 太子堂ワークショップ

太子堂小学校では、毎年夏に太子堂小中学生を対象に、「太子堂ワークショップ」と題して、水泳やお菓子作りなどさまざまな講座を行っている。2012 年で 6 年目となる活動で、もともとは、副校長が 2007 年から始めた。当初副校長は、学校を使用して活動を行っている団体に声をかけて講師になってもらい、児童に参加者をつのった。初年度は参加者も少なかったが、2 年目からは参加人数も多くなり、初年度に水泳の講師を頼まれ、児童の保護者でもある N さんが活動を手伝うようになった。PTA 会長 I さんも活動の助成金を獲得するための代表者になるなど手伝った。4 年目には、副校長が他の学校へ異動になったが、N さんと I さんで何とか継続した。それまでは活動の主体がはっきりとしていなかったが、2011・2012 年には世田谷区の地域の絆推進事業助成金をもらうなど、事務局としての機能をはっきりと持ち始めた。2 人では活動の継続は無理だということで、何人かに声をかけ、太子堂小学校の児童や卒業生の保護者を中心に現在は 6 人で運営を担っている。

講師は地域の活動団体のほか、小学校の保護者や、町会に張り紙をお願いするなどして募集し、講座も当初の 2 倍ほどに増えている。得意なことのある保護者や、町会長などが講師として参加している。「遊びとまち研究会」も太子堂ワークショップにて、2010 年「ガリバーになってまちをつくろう」や、2011 年「子ども 110 番シアター」という企画を行っている。始めのころは少なかった参加者も、2012 年には、全校児童 421 人に対して、270 人程が参加し、のべ 799 人の参加となっている。

4.3.3 太子堂防犯ワークショップ

首都大学東京、国士舘大学、東京大学、千葉大学の四大学の研究者による共同研究グループが太子堂 2・3 丁目地区を対象に、2012 年に「太子堂防犯ワークショップ」を行った。開催には遊びとまち研究会が協力している。防災のまちづくりに取り組んできた太子堂地区の空間を、子どもたちがどのように認知しているかを知ることで、今後の防災まちづくりの参考にするための取組みとなっている。子どもたちがパトロールを模して街を歩き、中学生と地域が協力してできる防災活動の可能性を検討するための材料にしたい考えである。参加する子どもたちにとっては、地域についてより深く知り、防災意識を高める機会となること、倒壊シミュレーションや GPS トラッキングなどといった科学技術に触れる学習機会となることが期待される。この成果は、地元地域の組織や行政に向けての提言としてとりまとめる意向である。

参加者は太子堂中学生 9 人、太子堂小学生 2 人、地区外の小学生 1 人、大学生 4 人の計 16 人で、3 チームに分かれ、1 時間かけて対象地区を歩きながら、50 箇所に設置してある旗を集めて点数を競った。50 個の旗のうち、10 個は印のついたエマージェンシー旗になっており、これを見つけた場合は、すぐに本部に帰らなければならない。発災時に中学生がパトロールをするということを想定しているので、緊急のけが人等を見つけた場合は、急いで本部に帰るという行動を表している。また、倒壊シミュレーションにより閉塞箇所が

設けられており、閉塞箇所には閉塞マンが立っていて通り抜けることができないなどルールには工夫がこらされている。参加者はGPSを携帯しており、どのようなルートを回ったのか、地元の中学生と外部からの人でまち歩きにどのような違いが現れるのかが研究者側の分析のポイントとなる。中学生は昼間の発災でも地域にいるため、発災時に重要な担い手となる可能性を持つ。中学生がどのような役割を担えるか、地域に対しての問題提起となるワークショップであった。

4.4 太子堂地区における地域活動の特徴

ここでは、本節で詳細に見てきた太子堂地区の地域活動について、その特徴をまとめておく。太子堂地区の地域活動における大きな特徴の一つとして、1980年代から行ってきた太子堂2・3丁目まちづくり協議会の活動がある。木造密集市街地域であることから、ハード整備の面で住民参加型の修繕型まちづくりを行ってきた。一方で、ハード整備だけでなく、他団体とも連携しながら、ソフトなまちづくりに対しても様々な手法を工夫し、行ってきた経緯を持つ。まちづくり協議会発足の背景には1975年の区長公選制復活と、当選を果たした大場区長により住民参加を掲げた基本構想・基本計画がある。区は住民参加の防災まちづくりのモデル地区に太子堂地区を指定すると、地区で街づくり懇談会を行うなど、防災街づくりにおける住民参加の重要性を訴えた。その後、住民側の意識も高まり協議会が発足すると、街づくり条例に基づく専門家派遣や各種助成金により、活動をバックアップしてきた。発足から30年たった現在でも毎月の協議会に担当職員が出席していることが、何より区がバックアップを続けてきた証拠である。

太子堂2・3丁目まちづくり協議会は行政を含め、地域で活動する団体や人びとの「協働の場」となっていたと考えられる。協議会には専門家派遣制度により、まちづくりプランナーが長い間入っていた。それに加えて、地区外居住者であってもオブザーバーとして参加できるため、先進的な取組みを見にこようと、様々な研究者や学生、院生が参加した。特に、協議会の発足時期に、地域で子どもの遊びを通してまちづくりを行う「子どもの遊びと街研究会」を組織していた院生や若いまちづくり専門家が協議会に参加し、一緒にイベントを行うなどしてきたことも重要である。1980年代当初、同時代に地域で芽吹いていた活動と科学反応を起こしながら、本来の取組みであるハードの整備だけでなく、ソフトな整備も一体に行ってきたのである。

現在行われているイベントにもこのような経験が活きている。たとえば、太子堂防犯ワークショップは太子堂2・3丁目まちづくり協議会が街づくり計画を見直すというところから、ハード以外の点からもまちを点検できないかと遊びとまち研究会に参加している研究者に相談があったことに端を発する[8]。これを受け、研究者同士のネットワークにより、研究者のグループが立ち上がり、行政や町会などを巻き込んだ「防犯ワークショップ」の開催にいたったのである。このようなことが可能になるのは、地域に研究者が入って研究を

[8] 2013年4月17日太子堂防犯ワークショップの結果報告会の参加者談話より。

行うということに地域が慣れているためであると考えられる。研究者にとっては、フィールドが提供され、地域はその専門的な知識や分析を活用できるというように、地域と研究者の協働がどちらにもよい結果を生み出しているように見える。

協働の場としての経験は、まちづくり協議会の外にも派生している。太子堂サバイバルキャンプは、町内会・自治会を中心に、PTA や消防団、青少年委員会など、従来からの伝統的地域組織による協働によって成り立つイベントである。そこに「遊びとまち研究会」主催の「せんたプロジェクト」の企画により、仙台から来た子どもたちが参加し、防災に取組む世田谷の子どもたちにも重要な経験をもたらした。この企画のファンド申請にはまちづくり協議会の運営委員も名を連ね、かつて協議会と一緒に子どもを参加させるワークショップを行ってきた研究者も参加している。

このように、「協働の場」は新しいネットワークや協働を生んでいく。太子堂ワークショップでは、副校長が始めた活動が保護者の担い手をうみ、講座の講師を地域の人びとにお願いするなど新しいネットワークを作り出していた。その中で「遊びとまち研究会」が講座を行い、また、地域の祭りなどでも「遊びとまち研究会」メンバーと太子堂ワークショップを担う保護者が顔を合わせるうちに、彼女たちが「せんたプロジェクト」を中心的に担うようになっていくことになる。イベント等の「協働の場」が新たなネットワークや「協働の場」を生み、それが蓄積されていく。この蓄積は地域にかかわる「人」自身にもなされ、人と人をつなぐ、組織をつなぐ、場をつなぐような役割を果たすことができる「人材」が地域に増殖されていく。太子堂地区の聞き取りで、自らを「つなぎの役割を担う」と語っていた人が 3 人もいたことがこのことを物語る。

一つの活動が多くの小さな活動に拡がっていっていたのは、「楽働クラブ」である。公園で花壇の手入れなどをしていると、自然に声がかかり、参加者が増える。参加者の中には、自分で別の場所で活動をする人たちがあらわれる。そのような拡がりがさらなる拡がりを生み、もともとの活動の担い手が感知していないところにも拡がっていた。一方で、子どもの遊びを通してまちづくりを考える活動は、かつて「子どもの遊びと街研究会」が太子堂地域で行っていた。この会は 1989 年に活動を停止したままとなっていたのであるが、似たような目的を持つ「遊びとまち研究会」が別のメンバーによって立ち上げられたのである。前者の活動の拡がりは、タンポポの種子のようであり、後者の活動の継続は、せみの繁殖のようである。

まちづくりや住民参加の真意をついていたのは、トンボ広場の管理である。広場立ち上げの際のワークショップが盛大に行われ、毎年の餅つきなども行ってきたというが、広場の状態を保つためには、近隣の方の毎日の声かけが重要であった。まちづくりとは、このような日々の生活の中でたゆまず行われ続けることが重要だということである。

最後に、これらの活動を下支えする行政等の助成制度も重要な役割を果たしていたことを指摘しておく。まちづくり協議会でみた街づくり条例による制度の活用、太子堂ワークショップの地域の絆推進助成金、遊びとまち研究会のまちづくりファンドの活用など、特

に活動の最初にはこれらの制度を活用し、軌道に乗せる必要がある。

以上から、太子堂地区の地域活動の特徴をまとめると、次の 6 点があげられる。(1) 多様な人びとや組織による「協働の場」の経験と蓄積、(2) またそれによるネットワークの拡がり、(3) ネットワークの核となる人材の創出、(4) ゆるやかな活動の拡がり、(5) 日々の活動の継続、(6) 活動を助ける助成制度。ここであげたような太子堂地区の地域活動の特徴は、まさに太子堂地区の集合的社会関係資本の特徴を表すものではなかろうか。

５．船橋地区

船橋地区は、船橋 1 ～7 丁目、千歳台 2～6 丁目からなる区域で、小学校が 4 校、中学校が 1 校あり、子育て世帯が多く住み、船橋地区区民防災会議活動などの防災活動をはじめ、地域活動に力を入れている地区である。ここでは、近年発足し活発に特長的な活動を行っている 2 事例を取り上げる。

5.1　子どもぶんか村

子どもぶんか村は、小中学生を対象とした地域の文化クラブ活動で、青少年船橋地区委員会の活動の一つである。2004 年 6 月に活動を開始し、「音楽くらぶ」、「伝統くらぶ」、「ボランティアくらぶ」、「演劇くらぶ」、「まち探検くらぶ」、「ものづくりくらぶ」、「映像くらぶ」の 7 つのクラブが運営されている。小中学生対象で、2012 年度の参加者のべ人数は 220 人となっている。講師は専門家にボランティアでお願いしている。地区に対して中学校校長から文化活動事業の提案がなされたことをきっかけに、子どもぶんか村の活動が始まった。この提案を受けた青少年地区委員会では、はじめにボランティアの講師を見つけることなどに苦労したが、2 月に提案があってから、6 月には部員を募集した。現在は活動費をいかに確保するかが課題であり、青少年地区委員会の予算の一部と、助成金等でまかなっているが、もらっていた助成金が切れるなど、綱渡りの状態である。

クラブに来る子の中には問題を抱えている子もいるので、学校との連携が重要だが、青少年地区委員会には現役の PTA 役員も入っているため、学校とある程度の情報交換ができる強みがある。青少年地区委員会にははじめから町会から推薦されてくる人や、PTA、学校長も入っているため、地域でのネットワークの前提がつくられている。毎年 3 月に行っている「子どもぶんか村発表会」は世田谷区の地域の絆推進事業助成金をもらい、町会なども入り、実行委員会形式で開催している。そのほかにも、町会は回覧板やミニコミ誌などで子どもぶんか村を PR してくれるなど、連携している。

青少年地区委員会の会長によれば、この活動を地区委員会で行っていることが重要なのだという。常に活動の対象である子どもの親たちが参加するということが重要で、NPO にしてしまっては、担い手が固定化してしまうというのである。その点、青少年地区委員会は毎年小中学校の PTA が必ず交代で入ってくるので、担い手が固定化されない利点がある。PTA として参加する人の中から、地域に残る人も出てくるので、地区委員会自体も少しずつ世代交代が起こる。このように、若い世代が地域にかかわるきっかけとなっている地区

委員会は、地区の中でも人材の宝庫だと思われており、町会や民生・児童委員協議会などからも声がかかる。青少年地区委員会が、地域人材の循環のためのポンプの役割を担っているというわけである。

現在青少年地区委員会の中で子どもぶんか村に中心的にかかわっているメンバーは、船橋児童館の幼児サークルで知り合った仲間が多い。幼児期以降も、PTA 活動を一緒にやるなど、子どもとのかかわりの延長線上に現在の地区委員会の活動がある。そのため、「地域活動とか、ボランティアという意識は全然なかった」という。「自分たちはただのお母さんたちで、地味に活動をやってきただけで、どの地区でも、誰でもやってみればできる」というのである。子どもぶんか村成立の背景には、学校も地域に開こうという時代だったということもあるが、そこに、何かやろうという若い世代の人たちがいたことが重要であった。若い世代の人たちが地域にいたことは偶然ではなく、この母親たちが児童館の活動ですでに地域とかかわっていたということ、また、前地区委員会会長が町会の人たちに、地区委員会の委員には若い人を推薦するようにと言っていたためである。

5.2　希望丘小避難所運営委員会

希望丘小学校では、2004 年から毎年体育館で避難所宿泊体験訓練を行っている。通常避難所運営訓練は町会ごとに行っていることが多いが、子どもたちが行きなれた学校に避難してくるものと想定し、学区単位の運営を行っている。授業の再開を第一とし、弱者の受け入れなどを念頭に実践的な訓練を行っている。

委員会のメンバーは、フレール西経堂自治会の役員、校長、PTA 会長と校外役員、PTA の OB、遊び場開放委員のほか、日赤、民生・児童委員などが入っており、40 人程が委員になっている。他の避難所と異なる点は、訓練において青少年委員や PTA が活躍しているということである。町会中心の避難所運営だと、運営側に高齢者が多くなり、発災時に即戦力にはなり得ない可能性があるためである。訓練では、児童の顔を知っている PTA と、地域の人たちの顔を知っている自治会メンバーで受付を担当するなど、現状に即した役割分担をしている。訓練では自分で考えて行動し、想定外のことでも臨機応変に対応できるようにしている。十分に訓練していても、担当者が必ず来られるとは限らないので、他の役割についても知ることができるように、2 年前からリーダー研修を行っている。避難所では、誰かをある役割に定着させるというのは無理であり、いろんな人がかかわるようにしないと実際の避難所開設時には役立たない。そういう意味で、避難してきた人の中からも運営にかかわってもらうことを考え、実際には避難所運営委員は指示をする役割に徹するほうがよいと考えている。

訓練では実際の場面を想定し、親と子どもが一緒に参加する。実際に宿泊を体験すると、床にじかはいやだという意見が出て、ブルーシートを敷くことになった。ブルーシートに通路を確保したラインを書きこみ、体育館に敷き詰めたところ、この学校では 200 人ほどしか受け入れられないということが確認できた。発災時にはまず誰でも受け入れられる体

制をとるが、落ち着いてきたら、順次第二避難所や町会設置の避難所など、その他の施設に移動してもらわなければならないということである。そうしたこともふまえて、防災の基本は自助であり、自助の部分の徹底をしてもらうことが重要という考えで行っている。経験することで自己の備えを啓発することも訓練の目的のひとつである。「こんなところで、何日も過ごすのはいやだ」ということを実感してもらい、避難して来なくてもいいように準備を促すことも大事な役目である。

障がい者の団体にも声をかけて一緒に訓練を行った。一緒にやってみることで、お互いに気がついていなかったことに気がつき、改善することができる。一次避難所として障がいを持つ人など様々な人を受け入れる必要があるが、立場が異なる人も自助が必要ということに変わりはない。支援団体にも参加してもらい各団体としてどうするか考えてもらうきっかけになればよいと考えている。2012 年の訓練では、医師と連携して医療救護所運営訓練を行った。医療救護所としての備蓄なども、区の担当者と医師では、必要なものの認識に食い違いがあることがわかった。何事も体験してみて初めてわかるということがあるので、PTA や地域の参加者に、それぞれの役割の中で気づいたことをそのつど出してもらい、要望書を毎年のように区に提出している。学校協議会により作成されたマニュアルがあり、運営方法等が記されているが、実際には想定と現実はぜんぜん違うということが訓練からわかってくる。

運営委員会で中心的な役割を担う自治会長は、1960 年ごろに自治会の保育所をつくる活動に参加した。その後保育園が児童館になるということになり、団地で土地と建物を無償提供して 1972 年に船橋児童館ができ、自治会として児童館にも協力した。その中に子どものネグレクトなどに関して熱心に取り組む職員がおり、児童館では週 2 回夕食を作る活動をしていた。そういう活動に、普通のお母さんたちも手伝ってくれるようになったという。1974 年には、初代の青少年委員になり、1975 年に PTA と児童館と一緒に、希望丘小学校遊び場開放をつくった。希望丘小学校では、PTA 会長を 1 年間担った経験もあり、このような会長自身の経験が、今の避難所運営の活動につながっている。

5.3 船橋地区における地域活動の特徴

以上、2 つの事例から見えてきた船橋地区の地域活動の特徴を挙げておこう。子どもぶんか村の活動は青少年地区委員会で行っているということが重要であった。さまざまな活動団体の課題として多くあげられるのは、担い手の固定化である。青少年船橋地区委員会は、毎年小中学校の PTA から必ず担当者があて職で就くことになっている。子どもを対象とした活動では、このような形で子どもの親たちが必ずかかわるという仕組みが重要とのことである。しかし、青少年地区委員会も、必ずこのように若い人たちが活躍できる組織というわけではない。町内会・自治会などの地域組織からあて職で入る高齢の担い手が多くを占めるということもありえる。これには、前青少年船橋地区委員会会長が、他の組織に対し、青少年地区委員には若い人を出してもらうように頼んでいたため、そのような土壌が

できていたと考えられる。

青少年地区委員会の若い人が活躍できるような土壌に、児童館の幼児サークルで出会っていたという現在子どもぶんか村の中心となっている世代が入ってきた。彼女たちは、あくまでも自分たちの子どものための活動を楽しく続けていたのであり、その延長に現在の活動があったのだという。ボランティアや地域活動をしようという気負った気持ちがあったわけではないので、どの地区でも、誰でもできるはずだというのである。

船橋児童館は、フレール西経堂自治会にとってかかわりの深いところで、現在の自治会長も 1970 年代から児童館の子どもの居場所をつくる活動にかかわっていた。このような活動にも、子どもぶんか村にかかわる普通のお母さん達がかかわっていた。船橋児童館で行われていた子どもにかかわる活動が、人材を発掘し育てる、インキュベーターの役割を担っていたと考えることができる。また、この自治会長は小学校で PTA 会長も務め、遊び場開放をつくり、青少年委員を務めるなど、長年学校とかかわり続けてきた。このような長年の活動の上に、現在の避難所運営の活動が成り立っているのである。

青少年地区委員会において若い世代が活発に活動を行っているため、ある意味ここが若い世代の発掘の場として、地域への若い世代のリクルート機能を持ち、他の地域組織にも影響を与えていく。子どもぶんか村の中心メンバーは、青少年委員や、民生・児童委員、補導員などの担い手として声をかけられ、町内会・自治会にも期待されている。

船橋地区の地域活動の特徴をまとめておくと、(1) 新しい人、とりわけ若い世代が入り活躍できる土壌、(2) 母親たちが楽しくかかわることができる活動、(3) 地域人材のインキュベーターの役割を担う活動、(4) ひとりの人が持つ様々な活動とのかかわりの蓄積、(5) 若い世代のリクルート機能と、地域全体への広がり、という 5 点が指摘できる。地域の社会関係資本を考えるうえで、非常に示唆的である。

6. 結論

地域における社会関係資本とは、どのような事象であるのか、またその測定にはどのような工夫が必要であるのかの問いに応えるため、太子堂地区・船橋地区の地域活動の事例を詳細に見てきた。2 地区の事例から地域の社会関係資本として捉えるべき 5 つの事象を指摘できる。第 1 に、「協働の場」である。ある組織の中に、さまざまな人や団体が参加するということもあるし、イベントを協働で行うということもある。このような場は、人や組織のネットワークを醸成させる。第 2 に、多様な人を活動に参加させるような、「リクルート機能およびインキュベーター機能」がある。これを機能させるには、楽しくかかわれるといった、任意にかかわるための条件が必要となる。これによって、参加者の輪が拡がり、さらなる拡がりを増殖させていく。第 3 に、地域における「活動の継続、蓄積」である。日々のたゆまぬ活動が重要であり、1 つの活動が新たな活動を生んでいく。第 4 に、「制度」である。活動の継続や、活動費の問題は、あらゆるボランタリーな活動にとって課題となる。新しい活動を助成するような制度や、エンパワーメントするような制度は、ボランタ

リーな活動を軌道に乗せることができる。第 5 に、「人材」である。地域活動を経験する中で、活動を行う上での必要な知識やノウハウ、ネットワークが養われていく。さらに上述の 4 つの特性が揃うことにより、このような「人材」が地域の中で多数創出される。このように活動の中で育成された「人材」は、地域の資源となり、人や組織、活動をつなぐ、またはつなぐことによって新しい活動を生む力となる。

これらの結果は、明らかにこれまで扱ってきた個人の保有する資源を表す「住民力」とは異なり、地域の集合的な資源として改めて扱わなければ捉えることができない事象である。今回捉えた 5 つの地域の事象は、Putnam が指摘した社会関係資本の特徴をさらに深く読み込む結果となっており、辻中他が住民同士のつながりや活動の参加度としていた地域の社会関係資本の内実であるといえる。社会関係資本の一つとされていた地域組織や地域の活動にとって、何が大事な点であるのか、どのようなことが地域の蓄積になり、またそれがいかにして好循環を引き起こすのかということが、地域活動の事例から明らかになったわけである。つまりこれらを指標化して測定することができるならば、地域の社会関係資本を数値で把握することができるだろう。

地域の社会関係資本を特徴づける上述の 5 つの事象を、関連付けて捉えるならば、(1)「協働の場」を設定し、(2)「リクルート機能」を持たせて、(3)「助成制度」を活用しながら、(4)「活動を継続し、蓄積していく」ことが、(5) 地域の「人材」を育成するということになる。(1) から (4) の 4 つの特性を備えた地域活動を展開していくと、人材も育成されていくということである。つまり、地域の社会関係資本が、「地域力」の構成要素であった地域の「人的資本」に対して、まさに資本としての機能を果たしているのである。このように「人的資本」に対して果たしていた地域の社会関係資本の効果が、個人の社会関係資本を表す「住民力」にも影響を与えていることは想像に難くない。地区別住民力得点にとって不利な地域特性を持つ地区を対象としながらもこの事実を抽出できたことは、「住民力」とは異なる「地域の社会関係資本」の存在を浮き彫りにした。以上の結果から、「人的資本」や「住民力」を醸成する「協働の場」「リクルート機能」「助成制度」「活動の継続」の 4 つの要件が有効に機能していくためには、どうしたらよいかが課題となる。これらがうまく機能するには、地域において活動が継続され、蓄積されるということが、さまざまに地域に波及効果をもたらすことは、本稿の事例から明らかとなったところである。

参考文献

Coleman, J. S., 1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital,” *American Journal of Sociology,* 94 Supplement: S95-120.（＝2006，金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編『リーディングス　ネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房：205 - 38.）

Durkheim, E.,1960(=1897),*Le suicide: étude de sociologie,* nouvelle édition,3e trimestre, Presses Universitaires de France.(＝1985，宮島喬訳『自殺論』中央公論新社．）

Kawachi, I., Subramanian, S. V. and Kim, D. eds., 2008, *Social Capital and Health*, Berlin: Springer Science. (＝2008，藤澤由和他監訳『ソーシャル・キャピタルと健康』日本評論社．)

埴淵知哉・市田行信・平井寛・近藤克則，2008「ソーシャル・キャピタルと地域――地域レベルソーシャル・キャピタルの実証研究をめぐる諸問題」稲葉陽二編『ソーシャル・キャピタルの潜在力』日本評論社：55-72.

Harpham, T., Grant, E., & Thomas, E., 2002, Measuring Social Capital within health surveys: key issues. *Health Policy and Planning*, 17(1), 106-11.

子どもの遊びと街研究会，1991『街がぼくらの学校だ！――「子どもの遊びと街研究会」の活動の記録』子どもの遊びと街研究会.

Lochner, K., Kawachi, I. & Kennedy, B. P., 1999, Social Capital: a guide to its measurement, *Health and Place*, Vol.5, 259-70.

森岡清志,2010「住民力と地域特性――世田谷区における調査結果から」『都市社会研究』NO.2,1-18.

Putnam, R. D., 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press. (＝2001，河田潤一訳『哲学する民主主義――伝統と改革の市民的構造』NTT 出版．)

――――,2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon&Schuster.（＝2006，　柴内康文訳『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.）

せたがや自治政策研究所，2010，2011，2012『せたがや自治政策』vol.2，3，4.

太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会，2005『太子堂 2・3 丁目まちづくり 25 年の歩み』一般財団法人世田谷トラストまちづくり（2013 年 4 月 30 日取得，http://www.setagayatm.or.jp/trust/fund/library/taishidou/ayumi25.htm）

辻中豊／ロバート・ペッカネン／山本英弘，2009『現代日本の自治会・町内会』木鐸社.

Van Deth, J. W., 2003, Measuring Social Capital: Orthodoxies and continuing controversies. *International Journal of Social Research Methodology*, 6(1),79-92.

和田清美・西野淑美・小山弘美，2010「大都市町内会の活動とネットワーク――東京都世田谷区・墨田区・八王子市地域リーダー・アンケート調査から」『日本都市学会年報』vol.43：99-108.

山内直人，2005「シビルソサエティを測定する――数量的把握の現状と課題」『公共政策研究』5：53-67.

吉田民人，1974「社会システム論における情報―資源処理パラダイムの構想」『現代社会学』1（1）：7 - 27.

吉永真理他，2009「四世代遊び場マップができるまで――2005～2008 年まで 4 年間の遊びとまち研究会の軌跡」住宅総合研究財団『「住まい・まち学習」実践報告・論文集』10：79-82.

資料編

ヒアリングシートおよびルポルタージュ

地域の社会関係資本について検討をおこなうため、太子堂地区、船橋地区について地域活動のキーパーソンに聞き取りを行った。聞き取りの方法としては、活動の概要、成り立ち、担い手、他団体との連携、運営上の課題、活動者本人と地域のかかわりなど、簡単な質問項目を用意し、話が途切れた時に質問項目に戻りながら、基本的には自由に話していただいた。話を聞きながら書き留めたメモをトピックごとに調査者がまとめ、対象者に内容を確認してもらい、何度か訂正のやり取りを行った。訂正指示をいただいた点については、基本的にそれにしたがっている。また、特徴的な活動については見学し、その様子をルポルタージュとしてまとめた。「太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会」と「遊びとまち研究会」については、出版物やホームページからその概要をまとめ、聞き取りの内容の後ろにいれた。

対象者の方々のご協力により、地域活動の様子がわかる貴重な資料となった。対象者の方々にはお時間をいただいてお話をうかがったうえ、聞き取りの内容を確認していただき、本当にありがとうございました。

調査日程

太子堂地区

2012 年 7 月　3 日　梅津政之輔さん（太子堂２・３丁目まちづくり協議会運営委員）
2012 年 7 月 21 日　太子堂サバイバルキャンプ見学
2012 年 7 月 31 日　中川京子さん（太子堂ワークショップ事務局）
　　太子堂ワークショップ見学
2012 年 8 月 25 日　山﨑和則さん（太子堂 5 丁目町会会長）
2012 年 8 月 28 日　吉永真理さん（遊びとまち研究会事務局）
2012 年 10 月 1 日　伊藤美和子さん（元太子堂小 PTA 会長）
2012 年 12 月 9 日　太子堂地区　防災パトロールワークショップ参加
2013 年 3 月 12 日　石川由喜夫さん（あそびの会園長）
2013 年 3 月　5 日　梅津政之輔さん（2 回目）

船橋地区

2012 年 11 月 29 日　佐藤三智子さん（青少年船橋地区委員会会長）、宮幸朱美さん（同副会長）、大垣真理子さん（青少年委員）
2012 年 11 月 29 日　駒井澄子さん（希望丘小学校避難所運営委員会委員長）、宮幸朱美さん（同副委員長）、舘脇合子さん（希望丘小学校 PTA 会長）
2012 年 12 月 16 日　子どもぶんか村音楽くらぶコンサート見学

太子堂２・３丁目まちづくり協議会
2012 年 7 月 3 日 10：00－12：30
場所　：梅津さん宅
対象者：梅津政之輔さん（太子堂２・３丁目まちづくり協議会運営委員）
（略歴：1931 年生まれの 81 才、生まれは江東区。勤めは通産省の公益法人で産業調査をしていた。1972（昭和 47）年に近隣のマンション建設反対運動に参加してから、地域のまちづくりとかかわりを持つ。太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会では、当初から副会長としてかかわってきた（現在は副会長をおいていないため運営委員）。）

【現在の太子堂の状況】
昭和 20 年代ごろ、庭にアパートを作る人が多かった。それが、老朽化して危ない住宅と化している。杉並の方まで木賃ベルト地帯といわれている。

【会の成り立ち】
1975（昭和 50）年区長公選になり、大場区長になって、住民参加のまちづくりを基本構想で打ち出した。住民参加のまちづくりのモデル地区として、1980（昭和 55）年に太子堂 2,3 丁目、北沢 3,4 丁目を指定した。その背景には、震災時危険度調査というのを都で行っていて、防災まちづくりを区のほうで前面に出してきたというのがある。北沢のほうは、1 年半くらいでビジョンを作って 1 度はすぐに解散してしまった。
太子堂は、1980 年 9 月からまちづくり懇談会を 1 年半にわたって行った。1970 年代のマンション紛争のときに、行政への不信が高まっていたから、最初は批判や要求を言っていた。だが、批判だけしていてもよくならないということに気がついてきて、自分たちでやろうということになった。1982（昭和 57）年 1 月に設立準備会を立ち上げ、11 月に協議会が発足した。当時、都市計画法の改正で地区計画制度が導入され、この手続き条例として世田谷区では街づくり条例が 1982 年 3 月に制定された。この条例により住民参加が制度化された。当時このように地区計画の手続き条例の中に住民参加の街づくりの制度をいれたのが、神戸と世田谷だった。

【運営】
会長や副会長をおくと縦型になってしまうから、はじめから組織はフラットがいいと思っていたが、当時は組織といえば、会長、副会長がいないと規約が通らなかった。
当時土地所有の関係を調査すると、農家の地主層の所有の割合が高かった。だから、ハードのまちづくりは地主層の協力がなければ難しいと思っていた。町会も古いタイプで、いわゆる旧住民が長く務めている状況だった。そういう状況をふまえて、当時の連合町会長に協議会会長を頼んだが断られた。個人としては協力するが、町会は住民が対立する可能性があるものには、かかわれないとのことであった。かわりに、地主の 2 代目層で若い

世代の人が、地主層と新住民のつなぎ役として入ってくれて副会長を担っていた。会合にはあまり出てこなかったが、こういうことが非常に重要だった。

会長をおかずに副会長 3 人をおいたのみであったので、区議会では「会長がいないような組織になぜ助成するんだ」といわれたこともあった。前からフラットな組織にすべきというのがあったので、1995（平成 7）年から、規約上は残っているが、副会長も置かないことにして 6 名のコアメンバーが運営委員になっている。運営委員 6 人のうち 2 人は一級建築士。2 人は不動産業。1 人は主婦の人。年齢は、30 代半ば 1 人、後は 60～70 代。1980 年のまちづくり懇談会から参加しているのは梅津さんだけで、協議会発足時からの参加の人が 1 人いる。

会員数は発足当時からのべで 148 人。そのうち 1／3 は亡くなった。現在は 58 人。出てきているのは運営委員 6 人とプラス 3～5 人。だから月 1 回の会合には、8～12 人程度しか出ていない。

協議会では、メンバーが全員一致した内容のみ採択する。さらに、権利にかかわる場合には住民全員に告知する。

【太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会会則】

① 住民主体のまちづくりをめざす
② 地域の住民は誰でもいつでも参加できる開かれた組織
③ 合意形成に努める
④ ハードだけでなくソフトを含めた総合的なまちづくりをめざす

設立当初にこの 4 つの運営原則を作ったことが大きかった。当時すでにソフトの面を入れていることがすごいというふうに評価されることもある。

【活動】

設立後 25 年の活動については、「世田谷区太子堂のまちづくり」日本建築学会編『まちづくり教科書 7　安全・安心の街づくり』（丸善）に書いたので、見てほしい。

区は、防災のまちづくりとして、「家の不燃化」、「狭隘道路は広げる」、「広場づくり」という 3 つを出してきた。協議会では、道路を広げるという話になれば、沿道の人と話し合いを行ってきた。道路の問題が一番対立する。自分のところの道路を拡幅するという話になると、「どうしてここなんだ」とか、「道路が広くなって通過交通量が増える」「違法駐車が増えるから意味ない」などいろいろと言い出す。その調和点を見出していくのがまちづくり。単純に妥協点を見出すだけではだめで、話し合いの中で新しい調和点を見出すということ。1 人 1 人が目先の利害だけで判断してはいけない。長期的、総合的、広域的にというのがまちづくりでは重要。

地域で活動しているうちに、一人暮らしのお年寄りが木賃アパートなどにたくさん住んでいることがわかってきた。まちづくりで知り合ったお年寄りで、千葉に引っ越した人な

どに、ひょっこり会う。「どうしたんですか」というと、「歯医者に来た」とか、「友達に会う」という。要するに、ずっと住んできたところに愛着がある。木賃アパートを建てかえて、マンションにするというだけでは、コミュニティを壊していくということ。コミュニティの重要性に気がついてきた。

個人的にも交流している神戸の長田区真野地区では、震災でも火事を免れた。吉村昭の『関東大震災』で、神田和泉町・佐久間町 1,600 棟が焼け残ったという話（バケツリレーで 8 時間火を消し止めた話）があって、真野の話はこれと同じだと思った。この神田の話を、まちづくりを始める前に読んでいて、感動していた。太子堂は下町。世田谷の他地区では同様のことは無理でも、ここでは可能性があると思っている。

【ソフト面の活動】

追い出されるお年寄りのことに気がついてきて、防災の面だけ考えていると、問題が出るということがわかった。そこで、いろいろなワークショップを行ってきた。1990（平成 2）年には「老後も住み続けられるまちづくり」についてワークショップを 1 年間行った。誰でも参加してもらおうということで、区の広報で呼びかけたところ、40 人程度を想定していたが、70 人も集まった。6 つのテーマに分かれてワークショップを行い、成果を班ごとに発表した。これをうけて、花を植えて街を美しくするボランティア活動を行う「楽働クラブ」が発足した。この発想を発表した大学生によると、会う高齢者がみんな元気で、いろんな知識を持っていたから、それを生かせないかということだった。

楽働クラブで緑道の花植えなどをやっているところを、三宿小の先生が見て、子どもたちに花植えを教えてくれないかということになり、ここ 10 年くらいずっと三宿小の 1 年生に緑道で花植えを教えている。その活動のあと、小学校に招待されて、一緒に給食を食べるなどしている。楽働クラブの参加者もはじめは 6 人位だったが、今は 25 人程度に増えている。

【トンボ広場】

道路拡張のため取得した、最初のポケットパークであるトンボ広場が草ぼうぼうになっていたので、花でも植えたいと区に問い合わせたところ、やってもいいということだったので、整備することにした。そこに植えるシンボルツリー（ひめこぶし）なども、話し合って決めた。整備も業者に任せるのではなく、竹垣づくりも住民が行った。

広場の手入れは、隣に住んでいる方がずっとやってきた。ここは、駅に近くて、放置自転車やごみなどすぐにいっぱいになってしまうのが当たり前の場所だが、そうなっていない。それは、そうしようとする人がいるたびに、「そこに置いちゃだめだよ」と、その方が注意してきたおかげ。その後、奥さんが亡くなったりして、活動を楽働クラブに引き継いだ。まちづくりは、きれいごとではなくて、こういう積み重ねだということ。緑道なども同じである。

【協議会の特徴】

特徴的なのは、ワークショップの手法を活用してきたということである。都市整備の分野では太子堂が最初かもしれない。東京工業大学の青木研究室がワークショップの手法を紹介していて、世田谷の職員に研修したりしていたが、当時院生だった木下勇さん（現千葉大学教授）が、太子堂でワークショップをやってみたいといってきた。彼が子どもにも参加させようということで、今でもその手法の成果が少し残っている。烏山川緑道の絵陶板は小学6年生の絵が原作。アメンボ広場のタイルは三宿小の6年生と一緒にやったもの。これは、ライオンズクラブがお金を出してくれて、左官屋さんがボランティアでやってくれた。

【まちづくりの変化】

まちづくりというのは、時代の変化の中で変わるべきだと思っている。当時は、まちづくりの支援制度がたくさんつくられたし、世田谷が一番豊かなときだった。木造賃貸住宅整備促進制度なども利用して、ポケットパークなどに 150 億円くらい使っている。今は、経済的変化がある。社会的変化もある。少子高齢化がいろんなひずみをおこしている。三宿小なども娘が通ったときは児童数1,300人だったのが、孫のときは200人となっている。

【まちづくりの評価】

区では、効率が悪いなどといわれる。今でも月 1 回の会議に街づくり課の職員が出てくるのにも、「もう出なくていい」、「任せればいい」、「いつまでやっているんだ」という批判が出る。太子堂のまちづくりは30年やってきて、本当は検証しなければいけないといっているが、役所ではなかなかやらない。

キャロットタワーは、敷地が 1.5ha、地権者 68 人（そのうち 40%はその後住んでいない）で、450 億円くらいかかっている。準備組合ができてから 17 年間かかった。太子堂 2・3 丁目は、敷地面積 35.6ha、住民 8,300 人、4,100 世帯で、150 億円くらい使って、30 年たっている。資金対効果というが、住み続けられる、継続してやっていくということをどう評価するかということを考えなければいけない。

【まちづくりにかかわるようになったきっかけ】

まちづくりに興味を持ったのは、1972（昭和 47）年に 15 階建てのマンションが国道 246 号線沿いにできるということで、説明会に行ったのがきっかけ。それまでは、会社の往復の道しか知らなかった。業者は、建築許可も取っているんだから、自分の土地で何をつくったってかまわないという態度だった。それに、だんだん腹が立ってきて、国会図書館に行って、日照権のことを調べて、次回から、先頭に立って反対を始めた。それがきっかけ。

太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会
2013 年 3 月 5 日　10：00―12：30
場所　：梅津さん宅
対象者：梅津政之輔さん（2 回目）

【組織の課題】

組織の課題は参加者の少数化、高齢化、固定化。

運営委員と会員の知識のギャップも重要な問題となっている。たまに出てくる人たちには、基礎からやらなければいけないが、それでは話が進まないというジレンマがある。そのため、どれだけ読んでいるかはわからないが、欠席していても議論の内容がわかるように、議事録を作って配っている。議事録の印刷は、出張所に行けばやれるのだが、行くのも面倒なので、微々たるものではあるが自腹で行っている。

沿道会議などに出てくる人はほとんど地権者だから、20 代の人など若い世代はおらず、みんな年配である。卒論や修論のために学生がオブザーバーとして来るが、そのあともかかわってくれるという人がいない。Y 君という人が熱心にかかわってくれて、就職したときに、太子堂のアパートに引っ越してきた。でも、そのあとぱったりと来なくなった。道でたまたま会ったときに、「ぜんぜん来ないね」と聞いたら、「毎日 10 時 11 時で」ということだった。それが若い人たちの現状。20 代、30 代の人たちは仕事が大変でかかわるのが難しい。特にもともとまちづくりに興味ない人たちに出てきてくれと言ってもそれは無理である。こういう現状のなかで、次世代に引き継ぐにはどうしたらいいかということは、はっきり言って僕には見えない。

【役所との関係】

一時期、行政職員が毎回会合に出るのはどうなのかという問題が起きたとき、住民主体でやっていこうということで、来てくれと要請したときだけ来てもらうように、3 ヶ月に 1 回にしたことがあった。でも、太子堂はいつも問題が起こるので、結局元に戻ってしまった。そうはいっても、住民主体でやるためには、行政に頼らず解決していくということは重要だと思う。

【他団体とのかかわり】

町会とのつながりは、町会の役割と協議会の役割が対立する部分があるからということで、直接の関係はない。町会長などは、個人で参加してくれている。

学校との関係では、梅津さんが三宿小学校協議会、運営委員の藤村さんが学校運営委員会の委員長を担うなどしている。太子堂小との関係は校長が変わってからは疎遠になったが、以前は総合学習の時間を使って、一緒にまち歩きをしたり、学校に呼ばれて児童の前で質問に答えたりということをしていた。

藤村さんは身近なまちづくり推進委員も引き受けている。梅津さんも以前は委員だったが小児病院跡地の話しが出てきて忙しくなってきたのでやめてしまった。

遊びとまち研究会については、過去のまち研も現在のまち研もどちらもメンバーというわけではない。木下さんにしても、吉永さんにしても太子堂をフィールドに使いたいというのがある。そういうときの協力者という立ち位置。人を紹介したり。とりもち役。今回のファンドのときもかかわった。

楽働クラブも、メンバーというわけではない。だけど、男手がいるとなれば手伝う。

【コミュニティへの影響】

楽働クラブの管理する公園・広場が 5 ヵ所に広がっている。活動をしていると「おつかれさま」と声をかけるだけではなしに、自分も参加するようになってくれて、参加の輪が広がる。それ以外にも、参加しているとやり方を覚えてきて、近くの公園で新しく始める人もいる。活動費をどうしようという話になるから、3 人以上のグループができれば、区と管理協定を結ぶと管理費をもらえるということを教えてあげる。最近は三宿幸寿会という 12 人の高齢者グループが活動を始めたということを聞いた。こういうかたちで、コミュニティづくりに一定の役割を果たしている。

【まちづくりとは】

協議会は、いつでも参加できて、いつでもやめてよいというのは今でも変わっていない。そもそも組織だとは思っていない。話し合いの広場だと思っている。会員か否かということではなく、まちづくりとは、生活している者にとって、「都市とはどうあるべきか」ということだと思っている。

でも、普段の活動の中では、まったく逆の反応が返ってくる。例えば、役所とのやりとりのなかで、提案したことに役所が返事をしないということがある。それに対して「街づくり条例で、住民の提案については返答しなければならないとなっているのに」というような話をしていると、「普段の会合では頭が痛くなるからやめてくれ」「そういうことは特別委員会をつくってやってくれ」といわれたりする。

マンションの建設や騒音の問題を協議会で取り上げてくれといわれる。でも、まちづくりと相隣問題とでは視点が違う。

【協議会の最近の動き】

不燃化率は、都が決めた 2015（平成 27） 年までに 60%という目標をおととしの 1 月に 65%に引き上げたので、そういう意味ではまだ達成していない。さらに、東京都が新防火地区に指定した。区は補助金のこともあるので、「木密促進不燃化 10 年プロジェクト」に応募しようとしている。そのため、今後は 70%を目指さなければいけない。

国立小児病院跡地を広域避難所にということをやってきたが、2002（平成 14）, 2007(平

成 19)年の広域避難所見直しでは見送られた。でも 3.11 があって、対応が変わってきた。現在の広域避難所に行くには国道 246 号線をわたらなければならないということで、評価委員長も、前はいい顔をしなかったが、広域避難所にしたほうがいいということで押してくれた。

こういう変化を受けて、広域避難場所指定を受けるという前提で、避難路の確保をどうするかということを考えなければいけない。そのため、地区街づくり計画を見直そうと、専門家派遣制度を使って、3 回ぐらい専門家の井上赫郎さんに来てもらった。来年度から専門家派遣の予算を取って、本格的に始める。

「太子堂 2・3 丁目地区まちづくり協議会」活動概要

協議会の発足

世田谷区では 1978 年策定の基本構想において、住民参加のまちづくり方針を打ち出し、災害に強いまちづくりの重点的な推進地区として、太子堂 2・3 丁目を位置づけた。そこで 1980 年に区は住民参加のまちづくりを実践するため、太子堂 2・3 丁目地区の住民を対象に「まちづくり懇談会」を始めた。計 7 回の懇談会で意見交換を行い、1 年半ほど経過したころ、住民参加のまちづくりを推進するためには、地区のさまざまな問題を定常的に討議する母体となる組織が必要という問題提起が区からあり、協議会を発足することとなった。住民有志が集まり、「まちづくり協議会設立準備会」において、会の目的や、運営の仕方、会則などを討議し、1982 年 11 月「太子堂地区まちづくり協議会」（その後「太子堂 2・3 丁目地区まちづくり協議会」に改称）が正式に発足した。

区のバックアップ

1982 年に制定された「街づくり条例」では、区民と区の協働作業として、住民参加によるまちづくりが制度的に位置づけられている。街づくり条例では、重点的にまちづくりを進める地区を、区議会の議決で「街づくり推進地区」として指定し、地域のまちづくりを進める組織を、住民の多数の支持がある場合に「認定協議会[1]」とし、協議会に対する支援や協議会からの提案を尊重することを定めている。

太子堂地区のまちづくりは、「街づくり条例」によって専門家派遣等の各種助成を受け、進められてきた。1984 年 4 月には街づくり条例に位置づけられている「街づくり推進地区」に指定され、同年 10 月に「認定協議会」に指定された。

参加者

太子堂地区および周辺の関係者は「自由に誰もが参加できる協議会」という考え方で、メンバーを公募し、地区外居住であっても、オブザーバーとして参加できるということに

[1] 1995 年の世田谷区街づくり条例改正によって、協議会の認定制度は廃止となっている。

した。その結果当初60名以上の参加を得た。協議会は原則として月1回のペースで開催し、必要に応じて運営委員会等を開いていくこととなっている。

協議会の性格

〔会の役割〕①まちづくりを話し合う場、②まちづくりに必要な調査・研究を行う、③まちづくりの計画案をつくり区長に提言する、④その他まちづくりの活動を進める。

〔まちづくりの目標〕①防災性能の向上をはかる、②快適な居住環境の形成をはかる、③文化的なまちづくりを推進する。

〔会の特徴〕①誰でもいつでも自由に参加できる（地域住民だけでなく、地域住民以外の人もオブザーバーとして参加している）、②情報をつねに地域に公開し周知する、③議決は多数決によらず全員一致をめざす、④話し合いの場づくりをめざす、⑤現場に出て学び考える。

太子堂のまちづくりは「修復型のまちづくり」といわれる特徴を持つ。個々の建物の建てかえをきっかけに、できるところから徐々に道路づくり、広場づくりなどのまちづくりを進めようという考え方である。

協議会活動、主な取り組み

・トンボ広場など多くの小さな広場…住民参加で広場づくりから管理まで行っている。
・烏山川緑道の整備
・まちづくり中間提案　1985（昭和60）年
・地区計画の提案　1988年（昭和63）年
・太子堂きつねまつり…1983（昭和58）年～1995（平成7）年まで続けられ、毎年さまざまな企画が登場した。
・ワークショップ…1990（平成2）年「老後も住みつづけられるまちづくり」、1991（平成3）年「ごみゼロ社会をめざしたまちづくり」、1992（平成 4）年「環境共生地区施設づくり」、1993（平成 5）年「三世代交流センターづくり」、1997（平成 9）年「地域に開かれた消防署づくり」
・沿道会議開催

まちづくりの成果

・地区街づくり計画（街づくり中間提案を受けて区が1985年に策定、2008年変更）、地区計画（地区計画の提案を受け、1990年に決定）
・公園・広場整備
・道路整備
・隣接する三宿 1 丁目地区、太子堂 4 丁目地区の協議会設立など、まちづくり活動の広がり

・「まちづくりの学校」として、太子堂を参考にしたまちづくり手法の波及

協議会活動の課題

①定例会参加者の少数・固定化、②新旧会員の知識格差・情報格差、③協議会メンバーの高齢化、④新しいメディアの活用、情報化対応、⑤行政との協働のあり方、⑥財政の自立化、⑦他団体との交流・連携

参考文献

太子堂 2・3 丁目地区のまちづくり 20 年のあゆみ編集委員会，2000『太子堂 2・3 丁目地区のまちづくり 20 年のあゆみ』太子堂 2・3 丁目地区まちづくり協議会・世田谷区世田谷総合支所街づくり部街づくり課.

太子堂 2・3 丁目まちづくり協議会、2005『太子堂 2・3 丁目まちづくり 25 年の歩み』一般財団法人世田谷トラストまちづくり（2013 年 4 月 30 日取得，http://www.setagayatm.or.jp/trust/fund/library/taishidou/ayumi25.htm）

梅津政之輔，2005「世田谷区太子堂のまちづくり」日本建築学会編『まちづくり教科書 7 安全・安心のまちづくり』丸善.

太子堂２・３丁目まちづくり協議会年表

	協議会の動き	区の動き
1979 年		基本計画策定
1980 年	区主催のまちづくり懇談会開催	
1982 年	協議会設立準備会を経て協議会発足	街づくり条例制定
1984 年	きつねまつり開催、トンボ広場オープン	
1985 年	まちづくり中間提案を提出	太子堂２・３丁目地区地区街づくり計画策定
1987 年	烏山川緑道整備の要望書を提出	
1988 年	地区計画策定に関する要望書を提出	
1989 年	沿道会議の開催（1990 年まで）	
1990 年	高齢社会をテーマとしたワークショップ開催	太子堂二・三丁目地区地区計画決定、都市整備方針策定
1991 年	区と事前協議協定締結、ゴミゼロ社会をめざしたワークショップ開催、「楽働クラブ」発足	
1992 年	環境共生地区施設づくりをテーマとしたワークショップ開催	公益信託「まちづくりファンド」設定
1993 年	三世代交流センターワークショップ開催	
1995 年	三太通り拡幅計画に対する沿道住民の反対と協議会としての対応	新都市整備方針策定、街づくり条例改正
1998 年	三太通りの沿道会議、小児病院跡地要望書を提出	
1999 年	地区まちづくり計画見直しに関する要望書を提出	
2000 年	「20 年の歩み」発行	太子堂２・３丁目地区を防災再開発促進地区に指定
2001 年	密集市街地における電線地中化を検討	
2002 年	小児病院跡地計画に対するワークショップ開催	
2003 年	くらしのみち研究会での地区内道路の討議、提案	
2005 年	地区計画見直しの検討、提案 ホームページ「太子堂２・３丁目まちづくり 25 年の歩み」完成（まちづくりファンド助成事業）	
2008 年		太子堂２・３丁目地区地区街づくり計画変更

ルポルタージュ　太子堂サバイバルキャンプ

2012 年 7 月 21、22 日の 2 日間に渡り、第 15 回太子堂サバイバルキャンプが太子堂小学校にて開催された。1998（平成 10）年から始まった太子堂サバイバルキャンプは太子堂小学校児童、太子堂中学校生徒を対象とした避難所宿泊体験の場である。学校避難所長の山﨑和則さんによれば、1997（平成 9）年に文部省のいじめ対策モデル地区に太子堂・三宿地区が選ばれ、中学生が活躍できる場をつくろうということになり、泊まりで避難所体験を行うことになったという。最初は学校協議会が母体で開催していたが、その後は実行委員会方式で行っている。町会の成年部を中心に 5，6 人のメンバーで担っている事務局会で大筋を決め、実行委員会に報告し運営している。運営費は参加者の会費（1 人 300 円）によって成り立っている。

太子堂小学校と太子堂中学校が隔年で行っており、今年は小学校開催なので小学生の参加者が多いが、中学生も何人か参加していた。以前は日曜日の午前中も訓練をやっていたが、中学生などは夜寝ないので、朝は何も身につかないということで、日曜日の朝すぐに終わりにする今の形式になった。前は途中で帰るということを認めていたが、しまりがなくなるので、親も子も最後までいられる人だけの参加にしている。低学年の子は父兄が必ず同伴することになっている。今年は「仙・太プロジェクト[2]」により仙台から来た子どもたちも参加した。今年度の参加者は、太子堂小児童・太子堂中学生約 60 名、保護者 20～30 名、地域の方々約 60 名、教職員約 10 名、参加者計約 150 名であった。

サバイバルキャンプ実行委員会メンバー

学区内の町会・自治会、青少年地区委員会、身近なまちづくり推進協議会、日赤分団、消防団、民生委員、児童委員、青少年委員、遊び場開放運営委員、太子堂小学校同窓会、太子堂中学校同窓会、太子堂小学校 PTA、太子堂中学校 PTA、太子堂出張所、太子堂小学校、太子堂中学校

行動表

20 日（金）16：00 サバイバルキャンプ説明会			
21 日（土）	14：00　各種訓練	19：00　仙台の子どもたちとの交流等	
10：30　会場設営	17：00　炊き出し訓練		
13：00　受付開始	17：30　夕食	21：15　夜食	
13：40　開会式	18：00　ドラム缶風呂体験	22：00　消灯	
22 日（日）6：00　起床	7：00　朝食	8：00　閉会 5F0F	

[2] 「仙・太（仙台・太子堂）プロジェクト」は、遊びとまち研究会が世田谷まちづくりファンド（災害対策・復興まちづくり部門）を活用し行っている活動である。その一環として仙台の子どもたちを世田谷に呼び、世田谷の名所を回るツアーを企画しており、その中に太子堂サバイバルキャンプへの参加が盛り込まれている。

【当日の状況】

受付が始まると体育館の中に子どもも大人も、続々と集まり、町会ごとに並んでいく。体育館の前方には各町会長や、団体の代表者、小・中学校の校長などが座っている。下の子を連れてきている保護者もいて、大変にぎやかである。今年特別に参加している仙台から来た一団は、一番後ろにいて、子どもたちは青いＴシャツを着ていた。

13：40　開会式

① 避難所長あいさつ（山﨑会長）
② 学校長代表あいさつ
③ 児童代表あいさつ（5 年生）
④ 参加者紹介　町会ごとに紹介され、順に参加者が立ちあがる。
⑤ 内容説明、注意事項（山﨑会長）

14：10　9 班にわかれて班ごとに自己紹介を行う。班には、小学生の各学年と中学生、仙台から来た子どもたちが分かれて配置され、子どもについてきた保護者もその班に入っている。自己紹介が終わってから、9 班を 3 班ずつ 3 チームにわけそれぞれ順番に訓練を体験する。

① ろうそくづくり（校庭）

雨が降っていたので、屋根がある狭い場所で行っていた。新しい油をひとりお玉一杯分ずつなべに入れ、固めるテンプルを入れて 80 度まで熱し、固めるテンプルがとけたら、それぞれのビンに分けていく。各自のビンに分けられた油の中に紐をたらし、まっすぐなるように割り箸で支えておき、完成。町会成年部の人がよく通る声で説明を行い、各班に大人が入って手伝っていた。

②避難所物品点検

トイレ組み立て、発電機、担架つきリアカーの物品の業者の人が来て、使い方などを説明し、実際に使ってみて体験していた。

③三角巾・担架訓練

三角巾で傷口をしばる訓練を行っていた。説明は消防団の人が行った。

平行して、家庭科室では、地域の人と PTA の女性陣がカレーの準備をしていた。子どもたちが作る分は材料を分けてボールに入れ、各調理台に配置。大人の分の材料を切ったり

洗ったりして準備していた。一方男性陣は、カレーのお湯を大なべで沸かす作業とドラム缶風呂のお湯を沸かす作業を行っていた。

16：30　３つの訓練を終えた子どもたちから順に、中学生を中心に外でかまどをつくり、家庭科室では材料を切り、夕食のカレー作りを始めた。子どもたちは苦労しながらも、火をおこしてカレーを煮はじめた。

17：30　できた班はなべを体育館のなかに運び、みんながそろったところで、アルファー米にかけていただきますとなった。自分たちの力で大なべで作ったカレーはよほどおいしいらしく、どんどんおかわりしてなべを空にしていた。私も、仙台のメンバーと歓談しながら大人用のカレーをいただいた。

子どもたちは食べ終わると体育館のなかを走り回ったりしていた。18 時をまわり、子どもたちはドラム缶風呂体験の準備にむかった。感想としては、中学生など何度も参加しているのか、訓練に慣れている子もいて頼もしく感じたということがある。その中に、低学年の子とその親御さんも交ざり、他学年との交流や、地域、父母の交流の場になっているようであった。

太子堂ワークショップ
2012 年 7 月 31 日 15：40～16：40
場所：太子堂小学校 PTA 室
対象者：中川京子さん（太子堂ワークショップ事務局）
（下の子が小学校に入った時から太子堂小でプールの支援員を 7 年間と理科の支援員を 4 年間している。子どもは現在高校 1 年生と中学 1 年生。）

【太子堂ワークショップの成り立ち】

今年は 6 年目だと思う。6 年前にいた副校長先生が一人で始めた。副校長先生は当時赴任してきたばかりで、もともと弦巻小学校でも同じ様なことをやっていたらしい。（中川さんは）水泳指導員をしていたので、水泳を教えてくれるように声をかけられた。他にも、卓球、お囃子、囲碁、図工教室など学校を使って活動している団体に声をかけてやってもらった。初年度は副校長先生が一人で運営し、児童や保護者はよくわかっていなかったので、申し込み者は少なかった。

2 年目は申し込みの人数も増えて、副校長先生が大変そうだったので、（中川さんは）つい「手伝います」と言ってしまい、名簿作りなどを手伝った。学校の先生には一学期の通知表つけの時期と重なることもあり、頼みにくかったようである。副校長は始めから、「そのうちに、地域でやっていけるように」ということを言っていた。

【活動の担い手】

当初、立ち上げということで、補助金をもらうために名前を連ねなければいけないので、当時の PTA 会長だった伊藤美和子さんを中心に、講座にたくさん参加していた児童の保護者に声をかけて、副校長先生と伊藤さんで補助金の申請などをしていた。そんな形で、3 年目までは、副校長先生と中川さん、伊藤さんの 3 人でやっていた。

次の年に副校長先生は異動してしまったが、名簿などが残っている程度で学校の中での引き継ぎはなかったようである。4 年目は中川さんたちが、副校長先生が残していった資料などを使ってなんとか継続した。

こんな形でやってきたので、誰がやっているのか保護者の中でもよく理解されていなかった。中心となる人や団体というのも特になく、主体がなかったが、5 年目となる去年から新しく作り始めている。今までは問い合わせ先を副校長にしていたが、今年からは自分たちの名前と連絡先も入れた。でも、自分たちがやめるとなったら終わってしまう活動である。

現在、運営は大体 6 人で行っている。仕事をしている人も多いので、活動の話し合いなどは、16：30～18：30 で行っている。自分が参加する上では、18：30 で終わるし、特に問題は感じてないが、もう少し運営の人数が多ければとは思う。

【他団体、学校、行政との連携】

学校との連携は、場所を貸してくれるということと、集金などの窓口、講師、当日欠席といった電話連絡など多大な協力をしてくれている。

講座で教えてくれる講師は、全児童の保護者にお便りを出したり、町会などに張り紙をしてもらったりして、毎年 1 人ずつ程度増えていっている。今年も、本格陶芸の講座が増えた。水泳では中学生など卒業生が指導員としてきてくれる。

行政からは補助金をもらったりしている。去年と今年は世田谷区の地域の絆推進事業の助成金をもらっている。

PTA が主体となってやっているというわけではないが、PTA の中から個人的に手伝ってくれる人が出てくれる。PTA で直接やっているわけではないから、割と自由にできるという部分はある。助成金などがないときには、印刷費は PTA でまかなっていたのかもしれない。副校長が中心だったときは学校で印刷をしていた。

【参加者】

始めのころは少なかった参加者も、今年は、全校児童 421 人に対して、270 人くらいが参加し、延べ人数は 799 人になっている。講座数もはじめの倍くらいになっている。上級生の参加は少なめで、1 年生はよくわからないためか少ない。2、3、4 年生がすごく多い。1 人につき希望の講座 3 講座まで申し込めるが、人気のある講座は抽選となるため、人気講座ばかり申し込んでいる子は 1 つしか出られない場合もある。最低 1 つの講座には出られるように第 1 希望中心に調整している。

【運営上の課題】

運営側の人数がもう少し多いほうがいい。保険料のことが現在の課題。保険をかけたことによって、「参加人数に余裕があるから参加していいよ」と当日募集ができなくなった。去年と今年は区の絆推進事業で助成金が出ているのでよかったが、3 年間しかもらえないので、印刷費なども今後どうしていくのか、活動費の面も課題。

ルポルタージュ　太子堂ワークショップ

7 月 31 日の太子堂ワークショップ講座、パティシエ（クレープ）、布にペインティング、水泳（上級）の 3 つをそれぞれ見学した。

太子堂小学校で夏休みに行われる「太子堂ワークショップ」は今年で 6 年目を迎える。地域や保護者の方々、太子堂小学校の協力により開催され、参加費は無料（1 人につき保険料その他で 100 円、材料費 ~~等~~は実費）で、対象は太子堂小学校児童、太子堂中学校生徒、保護者である。講座の講師は地域の方や保護者が担い、今年は 33 講座が開催される。

子ども達は、時間になると集まってきて、講座が開催されるそれぞれの教室に入っていく。まず、図工室で「布にペインティング」を見学した。4 年生くらいまでの低学年の子が 7 人、講師の説明を聞いていた。昨日は高学年を中心にもっと参加者がいたそうである。講師は卒業生の保護者で、絵の具の準備は参加者の保護者が行っていた。子ども達は、パレットに好きな色の絵の具をもらうと持参した T シャツや布バックにそれぞれに書き始めた。しばらくしてから戻ってみると、もう完成して次の布に絵を描いている子もいた。2 回目だという 4 年生くらいの子は、講師のお手本の繊細なアジサイを真似して書いていて、とてもうまくできていた。それぞれが個性的でいい作品に仕上がっていた。

次に家庭科室のクレープ作りを見学。講師は、保護者でもある近所の洋菓子店「パティスリーアーモンド」の方。参加者は 51 人と多く、実演しながら説明する講師を囲んで、人だかりになっていた。保護者も 6、7 人参加している。お父さんも 2 人ほど来ていた。子どもたちが生地を焼き始めると、はじめはうまくいかない子もいたが、講師が近くで見本を見せると上手になっていた。去年はロールケーキを作り、クレープと交互に行っているそうである。

その後、屋上にあるプールへ移動して水泳を見学。出席の子は 10 人強であった。講師は、太子堂小学校水泳指導員の女性 2 人と、卒業生の高校生である。2 チームに分かれて、1 チームはタイムを計っていた。もう 1 チームは泳ぎを教わっているようだった。少人数でプールを広く使い、泳ぎを本格的に教わっていた。

太子堂 5 丁目町会
2012 年 8 月 25 日（土）17：00－19：00
場所：ふれあいまつり会場（太子堂小学校校庭）
対象者：山﨑和則さん（太子堂 5 丁目町会会長）

【最近の町内の変化】

ワンルームが増えている。太子堂は戦時中に焼け残ったため、戦後すぐに建てられた建物も多く、建て替えの時期に来ている。年をとって住めなくなり、売りに出す人もいる。新しく建つと、ワンルームが多い。そういうところに住んでいる若い人は地域に出てこない。そのため、どんな人が住んでいるのかもわからない。マンションなどについては、町会費をマンション単位でもらっている。

町内で一番問題になっていることは、犬のフンの問題。人が見ているところでは拾っているが、朝早くとか夜遅くとか、見ていないときにそのままになっている。

【町会の組織】

町会の設立時期は戦後すぐだと思う。総会は年に一度、役員会は毎月行っている。現在、役員は 30 人くらい。幹部が 9 人。13 の地域ごとにそれぞれ部長がいる。ひとつの部の下には班があり、多いところで 7、8 班、少ないところで 3 班ある。道の向かい合ったところで班になっているらしいが、どういうふうにわかれているのか、町会長でもわからない。

現在の会員は、昔からの人が 6 割くらいで多い。でも、新しい人でも家を買った人などは入る。新しく家が建ったりした場合は、担当の人が「町会です」と一応は全部声をかけている。入らない人は、「お祭りとか、防災訓練とかうちは関係ありませんから」という。顔見知りになることが大事なので、関係ないということはないはずなのだが。

震災後でも、加入の状況は変わらない。入っている人が、何かしようというふうにはなっている。太子堂 5 丁目には成年部があり、40 代くらいの人が中心でやってくれている。ここにはマンションの若い人なんかも入ってきていて、熱心な人はいるということ。

【組織の強み、弱み】

組織の強みとしては、仲間意識が強い。結束がちゃんとしている。余計なことはいわない。やる人はちゃんとやる。

他の町会と比べて誇りに思っていることは、成年部があること。本町会にもあるが、うちの成年部は結束力がある。実際に動くのは彼らで、ふれあいまつりでの 5 丁目町会担当のフランクフルトも彼らが中心になって焼いている。成年部は 30 年くらい前からあり、独自に定例会やレクレーションも行っている。町会で受けている緑道清掃を町会から成年部に委託している。

弱い点は、行事が春のお花見と 10 月のお祭りしかないこと。この 2 つの行事は 30 年以

上前からやっている。お祭りは我々の年代が 30 代だったころの、30 数年前に子どもみこしを始めた。3 年に 1 回救命講習を行っているが、防災訓練は、うちの町会ではやっていない状況である。前は連合町会でやっていたが、それぞれの町会でということになった。どこも消防署主導で行っていてそういうのはあまり好きではない。どういう防災訓練がいいのか考えているところ。形だけやるならやらないほうがいい。でも、防災訓練も含めて、2 つくらい行事が増やせないかとは思っている。

余計なことはやらないようにしているが、普段から顔見知りになるようなことはどんどんしたいと思っている。

【町会・自治会以外の地域団体との交流】

青少年地区委員会、身近なまちづくり、社協、ごみリサイクルなどは町会長として役を担っている。明るい選挙も委員になっているし、町会から委員を出している。役員の中に民生委員もいる。こういった団体とは、行事などでもお互いに協力している。

市民活動のグループや NPO などとの交流は特にない。まちづくり協議会も、太子堂全体としての交流はあるが、5 丁目にはないので、あまりかかわりがない。

【会長さん自身について】

町内に住んだのは　幼稚園前からだから、50 から 60 年になる。途中は小さいころに引っ越したり抜けている。生まれは大森。18 歳から今もずっと同じ商社で勤めている。現在 62 歳。会長になってから 2 年目。前の会長が 14 年やっていた。ご高齢だったので、町会長の補佐をしていた。昔から町会の活動には参加していた。

会長就任以前の地域活動は、息子が中 3 のとき、これとこれだけ出ればいいからといわれて、PTA 会長を 1 年やった。その代わり、集まりは、夜か休日ということにした。

組織のリーダーとして心がけていることは、組織の中で怒ることはしないということ。何かあっても怒らない。会員の皆さんには、自分だけが声をかけているわけではなく、みんなそれぞれ、一人が一人に声をかけて集まってくるという感じ。

町会の活動は、評価したりされたりしたりするものではなく、住民に気持ちよく暮らしてもらうためのもの。町会としては、行政の下っ端ではなくて、こっちから発信したいが、今の組織力では難しい。でも本当は、そこのところが一番大事。町内に会館があるので、そこを使って何かしていきたいという思いはある。何でもいい。老人が集まってくるだけでもいい。何か一緒に行って、顔見知りになるということが大事。

遊びとまち研究会
2012 年 8 月 28 日 13：00－14：40
場所　：昭和薬科大学　吉永研究室
対象者：吉永真理さん（遊びとまち研究会事務局）
（略歴：国士舘大学工学部建築デザイン工学科教員時代に同僚の寺内義典氏の仲介で太子堂周辺地域とかかわるようになる。現在は昭和薬科大学教授。臨床心理士。）

【会の成り立ち】

2003 年に池尻児童館 40 周年を記念して当時の児童館スタッフから四世代目の遊び場マップ作りの話が持ち上がった。千葉大の木下さん、国士舘の寺内さん、太子堂の梅津さん、池尻児童館の職員、世田谷プレーパークの N さんなど、いろんな人が集まった。また「三世代遊び場マップ」の活動に関心を持っていた多聞小 PTA の I さん、三世代マップでインタビュー対象になった梅津さんの娘さんもいた。その人たちで、四世代目のマップを作ろうということを主な活動として会が発足した。マップ作りには大学生や大学院生も多く参加した。

【四世代遊び場マップづくり】

三世代遊び場マップのインタビューを受けた当時の子どもが今の子どもたちの親になっている。その子どもたちに遊び場を尋ねることで、四世代目の遊び場マップを全国で初めて作ろうととても盛り上がった。池尻児童館は 4 つの小学校区にまたがっている。三世代遊び場マップは主として太子堂地区を対象としていたので、池尻小、三宿小、多聞小の地域については、現在の子どもの遊び場だけでなく、第 1–3 世代の昔の遊び場も聞き取ることが目標であった。4 地域にメンバーが分かれ、チームでインタビューを行なった。

池尻地域の遊びを見つけるときは、少し工夫した。この地域のヒアリングを担当していた児童館職員は、児童館に遊びに来ている子どもたちを 2 時間も座らせて話を聞くということをしたくなかった。だから、子どもたちの遊びを見ながらやろうということで、「遊び見つけ隊」というのをつくって遊び場調査を行った。四世代目のマップを作るのに、5 年くらいかかっている。太子堂地域の四世代目の遊び場調査では三宿の「あそびの会」という幼稚園出身者がよくまちで遊んでいたので、よいインフォーマントになってくれた。その母たちが現「せんたプロジェクト」を担う中心メンバーになっている。

【その他の活動とメンバーの広がり】

定期的に研究会を開催し、遊びとまちに関する多様なテーマについて話し合った。イベント（別表）も開き、まちづくりファンドにも応募した。プロジェクト T のメンバーとカナダにも行った。やがて、児童館に来ていた高校生の子どもたちが、面白そうなことをやっているということで、入ってきてくれた。児童館のキャンプを手伝うなど、積極的にボ

ランティアをしている子たちで、自分たちで T&I というチームもつくっていた。池尻児童館の屋根裏みたいなところに調理場があり、そこで料理を作って食べたりした。エコシティのコンクールに出たり、いろいろなことをやった。

今かかわってくれている太子堂小のお母さんたちとは、完成したマップを、太子堂小で行っているふれあいまつりで配るということになって、その辺から交流が始まった。組織として関わりがあるのは、児童館、小学校、プレーパークなどがある。

【活動の成果】

はじめのまちづくりファンド、コミュニティ活性助成金、日産の助成金、今回のまちづくりファンドとさまざまな助成金をとって、活動を行ってきた。

エコシティのコンクールでの表彰、地図を作成、カナダで GUIC 活動のプレゼンテーションも行った。そのほかにも、市民活動支援コーナーで全国の遊び場マップの活動を借りた資料や木下さんの手元の資料と一緒に紹介したりした。

【今後の活動と課題】

活動の課題は、地域の中でどうやって継続していけるか。太子堂のお母さんたちがかかわるようになってくれたことが今後につながっていく。また、遊びの環境が悪くなっているなかで、それをどう変えていけるか。そういう意味でも、プレーパークと連携していければと思っている。プレーパークが地域にとって重要な拠点であり、プレーリーダーのスキルが重要だと考えている。

遊びとまち研の活動が開始されて以来、気づいた変化としては、年々児童館の職員の人たちが、忙しくなっていることがあげられる。少ない人数体制で幼児から中高生まで対象にしなければならない状況であり、仕事の範囲以外での活動をする余力がなくなっている。一方で、まちと子どものことに関心を持つ人が保護者の中に増えてきている。この人たちは同時にまちづくりを担う新しい人材にもなりそうな、アクティブな人たちである。

【せんたプロジェクト】

今年、まちづくりファンドをとって、仙台の子どもたちを太子堂に呼び、こちらのメンバーも仙台に行ってきた。きっかけは、2011 年暮れに仙台の N さんたちと話し合って、外からの支援が被災地には今必要であると言う話を聞き、年明けに、移動式の遊び場活動を通して被災地支援をしている人たちでミニ講演会を実施するなどの交流の中からやろうかという話になり、ファンドをとった。

仙台の子たちを呼んだときは、太子堂のお母さんたちの発想で、太子堂サバイバルキャンプに参加してもらえばいいのではないかということになって、仙台のメンバーにもサバイバルキャンプに参加してもらった。学校との調整は現役 PTA が中心になってまとめた。太子堂小学校児童の家にホームステイしたのもとても仙台の子たちにはよい経験となった。

反対に太子堂から仙台に行った際にも、世田谷の子どもたち、親たちは貴重な経験をしてきた。仮設住宅でのヒアリングでは昔の遊びの話をたくさん聞くことが出来た。仙台でのヒアリング成果はマップにまとめた。

「遊びとまち研究会」活動概要

目的

子どもの遊びの減少、遊びにくい街の環境の現状に対して、子どもの視点から街のあり方を考え、よりよくしていくことを目的としている。

メンバー

池尻・三宿・太子堂周辺の小学校の PTA のお母さん方、池尻児童館、太子堂 2・3 丁目地区まちづくり協議会、プレーパーク関係者、大学の研究者・学生など、いろいろな立場で池尻・三宿・太子堂地域にかかわっている人たち

行ってきた主な活動

「四世代遊び場マップづくり」

「せんたプロジェクト」

・三宿一丁目まちづくり協議会　たぬき祭り参加

・池尻児童館　村まつり参加

・世田谷プレーパーク　青空祭り参加

※　イベント参加時に大学生や大学院生が、自分の研究テーマに沿ったインタビュー調査やアンケート調査を行うこともある。

参考文献・資料

吉永真理，2010「子どもが育つ遊び場環境」子どものからだと心・連絡会議編『子どものからだと心白書 2010』: 52-5.

吉永真理，2009「多様な体験が可能な空間の創出―子どもの視点からのまちづくり」子どもの文化研究所『子どもの文化』41(4) : 2-9.

吉永真理他，2009「四世代遊び場マップができるまで―2005～2008 年まで 4 年間の遊びとまち研究会の軌跡」住宅総合研究財団『「住まい・まち学習」実践報告・論文集』10 : 79-82.

遊びとまち研究会ホームページ（2013 年 4 月 30 日取得，http://setagaya.kir.jp/asobitomachi/index.php）

遊びとまち研究会活動，2012，遊びとまち研究会活動ブログ（2013 年 4 月 30 日取得，http://blogs.yahoo.co.jp/asobimitsuketai）

遊びとまち研究会年表

2004	2003 年池尻児童館 40 周年をきっかけに集まったメンバーで結成。
2005	まちづくりファンド助成獲得。四世代目の遊び場マップ作成開始。まち探検やグループインタビューを行う。
2006	プロジェクト T（たぬきのポンポ公園）のプロセス[3]が海外でも話題となり、プロジェクトTおよび遊びとまち研究会がGUIC[4]　Japanとして認定を受け[5]、「GUIC＋10 in Canada」に参加しプレゼンテーションを行う。
2007	池尻児童館にて「ちずフェスタ」を開催。暫定版の四代目遊び場マップの披露。日産化学財団の助成を受けた「遊び見つけ隊[6]」活動開始。児童館の活動のサポートをしていた中高生のグループがまち研に参加するようになる。
2008	遊び見つけ隊（小学生グループ）と T&I リーダーチーム（中高生グループ）がエコシティ世田谷コンクールで銀賞と佳作に入賞。
2009	四世代遊び場マップ完成。高校生（T&I リーダーチーム）企画「せたがやクエスト」開催。ふれあいまつりにて遊び場マップ展示会を開催。そこで太子堂小のお母さんたちと出会う。
2010	高校生（代替わりした T&I）企画「せたくえ 2」開催。太子堂小 WS「ガリバーになってまちをつくろう」開催。ミニシンポジウム・マップ展示会＆まち歩き・移動式子ども基地開催。
2011	太子堂小学校 WS「子ども 110 番シアター」開催（まち研＆（社）子ども安全まちづくりパートナーズ＆RRR[7]のコラボ企画）。
2012	まちづくりファンド災害対策・復興まちづくり部門助成獲得（せんたプロジェクト）。太子堂サバイバルキャンプに仙台の子どもたちを呼んで参加。その後メンバーが仙台を訪問。仙台市六郷地区、七郷地区の今と昔の遊び場、震災前後の変化を記したマップを作成。宮城県新しい公共の場づくりのためのモデル事業 「学習会『あたらしい街』づくりにおける子どもの視点」にて配布予定。

[3] 子どもたちが参加して提案したデザインが実現した遊び場づくり・公園づくりのプロジェクト。子どものころ、プレーパークでたくさん遊んで過ごしたよい思い出をもつ公園課の職員が、子どもの意見を反映させた公園づくりを成功させた事例となっている（吉永 2010）。
[4] GUIC（Growing Up In Cities）は世界各地で展開されている若者・子どもの参画を推進し、アクション・リサーチを通して環境改善をすすめる草の根的な活動（吉永他 2009）。
[5] 四世代遊び場マップづくりや、児童がデザイン提案に挑戦して、住民と行政の協働によって公園が完成した活動のサポートをしたりするグループとして遊びとまち研究会の活動が GUIC に認定された（吉永 2009）。
[6] 自然や社会的背景の異なる沖縄の児童館の子どもたちとの交流を通して、自らの地域や遊びを中心とする暮らしについて見ていこうという企画。子どもたちを遊び場に連れ出し、実際に遊んでいる様子を見せてもらい、後に地図上にまとめる作業を行った（吉永他 2009）。
[7] RRR（スリーアール）は T&I リーダーチームを卒業した子たちのグループ。

2012 年 10 月 1 日　13：00～17：00
場所：レストランけやき（世田谷区役所）
対象者：伊藤美和子さん（元太子堂小 PTA 会長）
（高校 3 年生の息子さんと、中学 2 年生の娘さんがいる。ご自身も太子堂小学校出身でご実家の隣に住む二世帯同居。太子堂ワークショップの事務局や、遊びとまち研究会にもかかわっている。）

【地域での活動】
現在は太子堂中学校の PTA で生活指導委員長（他でいう校外委員長）をしている。このあて職で青少年地区委員会に入っており、見回りなどを中心に行っている。青少年地区委員会はふれあいまつりや、マラソン、もちつきを行っている。もちつきはおもち屋さんが廃業してしまったため、全体ではできなくなり、今年から太子堂小学校だけで行うことになったので、地区委員会としては見守る姿勢である。お祭りなどでも、来場者はほとんどが生徒と保護者なので、顔を見知っている人がしたほうがいいということで、禁煙の注意など見回りやパトロールを中心に担当している。他には、防犯・防災のまちづくりマップの作成を現在連合町会と一緒に行っている。

【PTA 活動のきっかけ】
はじめは上の子が小 4 のときに、広報委員会に入っていた。そのころの広報誌は、運動会の写真などでも白黒でつまらないものだったので、幼稚園で一緒の仲のいいお母さんたちと、「広報誌をもっとよくしたいよね」という話になり、「じゃあ、みんなで一緒に手を上げてやろう」ということになって、みんなでやった。それがとても楽しかった。写真もカラーにして、いろいろ工夫した。でも、その年で事実上広報委員会がなくなってしまった。委員をやる人が少ないので、区から予算が出るようなものは残っても委員の役職数はどんどん減っていっているのが現状となっている。
次の年は、娘が小学校にあがり、小 5、小 1 ということで、校外委員がまわってきた。校外委員は地区ごとに委員を決めるもので、高学年になるとなんとなく番がまわってくる。最初の話し合いで委員長を決めるのだが、みんな下を向いていた。自分も下を向いていた。当時の委員長があみだくじを提案し、あみだで決めることになり、見事当たってしまった。そこから、すべてが始まってしまった。校外委員長は対外的にもいろいろと交渉ごとがあり、大変な役職だった。
次の年に、校外委員長を続けるか、家庭教育学級の委員長をやってほしいということで、家庭教育学級の委員長を引き受けた。その次の年は、私事だが家の建て替えがあり、仮住まいなど忙しかったので、みんな近所に住んでいるから、「伊藤さんのところ建て替えていて大変ね」ということを周りもわかっていて、今年は休みという感じだった。次の年は、1 年休んだんだからという感じで、PTA 会長の話が来た。校長先生からも打診された。同じ

太子堂小出身で知っている 1 人が推薦委員をしていて、「他の委員も本部に残るから」と推薦されてしまった。太子堂は二世帯同居が多く、伊藤さん自身も太子堂の出身で、両親と同居している。遊びとまち研究会や、太子堂ワークショップなど一緒に活動している仲間もかつて同級生だった人たちである。

【太子堂ワークショップ】

娘が小 4 のとき、副校長先生が赴任してきて 2 年目からかかわりはじめた。その年は 80 周年だった。副校長先生だけでやっていたが、誰か手伝う人を紹介してほしいということで、1 人紹介した。副校長では助成金の代表になれないので、伊藤さんが代表者となって助成金に応募した。プレゼンテーションの場があって、20 万円くらい取れたと記憶している。スポーツ財団の講座としても助成を受けて、運動の用具に関してはそれでそろえられた。ダンスなども、ラジカセを買ったりした。会計なども副校長先生がすべてやっていたので、備品の管理などどうなったかわからない部分もある。

印刷なども、はじめは副校長 1 人でやっていたので、職員室でコピーをとっていたが、その後は PTA でやっていた。伊藤さんが会長のときに、「PTA で行っている活動ではないので、本来なら、PTA が出すべきものではないが」ということで打診したところ、「太子堂小の子どもたちのための活動なので援助しよう、各クラスには伝えておく」ということを言ってもらえたので、PTA 室の備品を使っていた。今は、区の地域の絆推進事業の助成金をもらっているので、独自の予算で出している。

去年は伊藤さんと中川さんだけだったが、もうそれだけでは無理だからということで、何人かに声をかけてみんなでやるようになった。

【遊びとまち研究会（まち研）との出会い】

2 年前の 2011 年 8 月の太子堂ワークショップで RRR[8]の子達が「子ども 110 番」をやってくれた。以前にも、「四世代遊び場マップ」をふれあいまつりで紹介していたり、いろいろな場で吉永先生と会うことが多かった。PTA 会長会でも、遊び場マップの話題が出て、吉永先生の話が出たりしていた。

四世代マップには、自分は参加していなかったが、息子は参加していた。石川さんの「あそびの会」の子たちが遊びをたくさん知っているということで声がかかり、息子もその子たちと仲がよかったので入っていた。石川さんのうちはすぐ近くで、石川さんの奥さんは昔から私にとって「近所のお姉さん」だった。

まち研に実際にかかわり始めたのは、昨年（2011 年）末くらいから。吉永先生が、まちづくりファンドの企画を持ってきた。その前は、子ども・遊び・まちづくりなどのテーマで講演会が三茶であれば声をかけてくれて、行くという程度だった。「ガリバーになってまちをつくろう」という太子堂ワークショップでの企画などもあった。ファンドが実際に決

---

[8] 遊びとまち研究会で活動しているグループ

まってから、娘たち中学生も参加するようになった。

【まち研の活動】

ファンドの企画から参加したので、通常のまち研の活動が実際どういうものかわからないが、東大の真鍋先生が太子堂小の遊び場マップを作ったのを報告したりしていたので、かかわっている人たちが、他のまちづくりで行ったことを発表して、意見交換したりということもあるのではないか。

まち研の会の意義は、「遊び」や、「あそこに木があって」などの思い出の話から、住んでいるまちを大事に思い、「きれいなまち」とか、「住みよいまち」とかそういう思いにつながるということだと思う。子どもたちは、「ここは暗くて怖い」とか子どもたちの視点がある。「あのおばあちゃんいつもこの時間に杖をついて通るけど、最近見ない」と子どもが言っていたら、そのおばあちゃんは息子さんの家に行っていたとか、子どもたちはそういうのをよく見ている。まちをよく見ることによって、住環境をよくしていこうとか、そういうことにつながる。まちに愛着心がわき、地域行事に参加することによって、顔見知りになって、それが、有事のときにとても大切になる。

今回のファンドの報告でも、今苦労しているところでもあるが、遊びからまちづくりに持っていくのがどうしたらいいか難しい。難しいけど、とにかくもっていく。

まち研とのかかわりは、言われてみると、今までは受身的なことしかやっていなかった。これから何がしたいというのも、考えたことがなかった。自分はつなぎ役だと思っている。誰かが、こんなことをやりたい、こんな人を紹介してほしいというときに、つなぎ役としているのだと思う。PTA 会長という役職自体も同じ役目。会長なんてたいそうな名前にしないで、窓口くらいでいいと思っている。

【太子堂の特徴】

子どもたちは、三軒茶屋界隈では、誰に見られているかわからないからポイ捨てもできない。それは、大人も同じ。太子堂にはそういう付き合い、下町のような付き合いがある。近所の人たちは、お互いに小さい頃から知っている。小さい頃は、そういう近所の人に見られていたりというのがいやだった。でも、今は自分がそうなっている。そういうのが今は大切だと思っている。

太子堂小の PTA 会長も 10 年以上さかのぼると、地元の名士みたいな人が担っていた印象がある。男性が多くて、地主さんとか、歯医者さんとか。それが 10 年前くらいから、みんな腰が引けるようになって、（伊藤さんの）先代と二代前の方も、特に地元の出身という人ではなかった。この 10 年くらいで変わってきたのではないか。

【太子堂の地域活動の状況】

町会との関係でいえば、子どもがいる家族は、お祭りなどいろいろと見る機会や、かか

わりがある。でも、核家族で引っ越してきてという人は、入っていない人もいる。町会に入っていても、入っていなくても、保護者はお手伝いスタッフとして、いろいろなイベントを手伝う。ふれあいまつりでも、お父さんたちはちょうちんをつるす係になっている。行事に出て手伝ったりということはあっても、町会の中心になっているのは先輩たち。「いつかまわってくるのかな」みたいには感じる。今は、子育てがあったり、仕事があったり、生活時間がずれる。

太子堂サバイバルキャンプは避難所運営委員会がやっていて、学校、PTA はもちろん、いろいろな団体が協力している。子どもがコアとなって、いろいろな団体や組織が集まる。子どもがいなかったり、町会に入っていない人で、声がうるさいなどの苦情が出る場合がある。そういう人たちにも理解してもらえるようにしていかなければいけない。小学校でお祭りがあるときに、「お祭りがあるのでよろしくお願いします」ということを子どもたちに手紙を書かせて、近所に配ったり、1 週間前くらいからのぼりを立てておくだけでも違うと思う。

地域の活動は、それぞれ活発になされている。消防団の第二分団は、むかし、NTT の火災のときに、ポンプ車が路地に入れない中で、初期消火を行って表彰されたこともあるくらい。そんなだから、誇りを持ってやっている。消防団や成年部もあるし、小学校のお父さんのソフトボール部もあるから、おやじの会はない。

小学校や中学校の保護者はいろいろと地域にかかわる機会があるが、卒業してしまうと、どこかに所属しているということがなくなる。卒業生のサポート隊というのが桜小にあるそうなので、中川さんとそういうのがあったらいいという話しはしていた。今は、個人的にそういう元 PTA のお姉さんたちに何かあれば協力をお願いしている。

【伊藤さんご自身のこと】

化粧品会社の事務の仕事を週 3，4 日していて、3，4 年続けている。この仕事は幼稚園のときのママ友の紹介。

地域活動のやりがいは、あまり見えないところを評価されたときにうれしいと思う。あと、子どもたちが声をかけてくれたとき、道路の向こうから「会長～」なんて声かけてくれて「会長っていうのは、し～」みたいな。今の小学生から高校生くらいまでは顔を見知っていて、あいさつしたり、注意したりできる。世代が違う人たちがそれぞれそういう関係を持っているのではないか。

夕飯時に会議ということが多く、子どもたちだけで食べたりということもあった。だんなさんも、しょうがないなという感じ。結婚したころから、買い物行けば、いろんな人に声をかけられてというのを見てきたし、会長になるときも、町会長とか、近所の人に、「来年は奥さんにお役がまわってくるから、よろしく」ということを言われていたらしい。活動できるのも、家族の協力があってこそ。

ルポルタージュ　「太子堂地区　防災パトロール」ワークショップ

12 月 9 日に、太子堂地区において防災パトロールワークショップが開催された。企画したのは、首都大学東京、国士舘大学、東京大学、千葉大学の四大学の研究者による共同研究グループで、遊びとまち研究会が協力している。首都大学東京の井上さんは卒業論文の課題として、今回のワークショップに取組み、人やものの手配などを行った。

今回の防犯パトロールワークショップは、防災のまちづくりに取り組んできた太子堂地区の空間を、子どもたちがどのように認知しているかを知ることで、今後の防災まちづくりの参考にするための取組みである。子どもたちにパトロールを模して街を歩いてもらい、中学生と地域が協力してできる防災活動として、パトロールという形態の可能性を検討するための材料にしたい考えである。参加する子どもたちにとっては、地域についてより深く知り、防災意識を高める機会となること、倒壊シミュレーションや GPS トラッキングなどといった科学技術に触れる学習機会となることが期待される。また、この成果は、地元地域の組織や行政に向けての提言としてとりまとめる意向である。

【当日のスケジュール】

11：00　三軒茶屋駅スタッフ集合
11：30　まちづくりハウス到着
11：45　打ち合わせ
自己紹介、流れやルールの説明、閉塞マンの指名、参加者の確認
12：30　ひょうたん池に移動
町会の人から、いすや机を借りて配置。各自お昼などを取る。
13：00　ワークショップ参加メンバー集合、説明
13：30　作戦会議
13：45　まち歩き開始
14：45　まち歩き終了
15：00　まちづくりハウスにて総括
16：00　解散

【スタッフ側参加者】

井上さん（首都大学東京）、饗庭先生、伊藤先生、讃岐先生（首都大学東京）、寺内先生（国士舘大学）、真鍋先生（東京大学）、近江屋先生（千葉大学）、国士舘大学学生 6 人、首都大学東京学生 10 数人、その他数人
役割分担：ひょうたん池の本部 2 人、閉塞箇所に立つ閉塞マン 14 人、まち歩き参加（大学生 4 人）、中学生・小学生参加者へのつきそい数人、おしるこ作り 2 人

【ワークショップのルール】

赤、青、黄の 3 チームにわかれて、範囲の決まった街中を歩き、設置してある旗を集めてくる。旗は 50 箇所に設置され、ビンに赤、青、黄三色の旗が立っている。設置している範囲は事前に説明するが、地図は持たずに歩く。印のあるエマージェンシーを意味する旗を見つけた場合には直ちに本部に届けなければならない。普通の旗は 1 本につき 1 点だが、エマージェンシー旗は届けた時間の早さにより、点数が高く設定されている。合計点数の高かったチームが優勝となる。

発災時に中学生がパトロールをするということを想定しているので、緊急のけが人等を見つけた場合は、急いで本部に帰る行動を表しているのがエマージェンシー旗の役割である。時間がたつほど点数が少なくなるのは、その分生存率などが変わってしまうことを想定している。

倒壊シミュレーションにより、閉塞箇所が設けられており、閉塞箇所には閉塞マンが立っていて通り抜けることができない。閉塞マンと出くわした場合、じゃんけんをして勝ったらお菓子がもらえ、現在位置確認のため地図を見せてもらうことができる。

参加者は GPS を携帯し、どのようなルートを回ったのか、地元の中学生と外部からの人でまち歩きにどのような違いが現れるのかが研究者側の分析のポイントとなる。

【参加者】

太子堂中の中学生女子 6 人（青チーム）、太子堂中の男子中学生 3 人と女子小学生 3 人（太子堂小 2 人、横浜から 1 人）（赤チーム）、地元ではない大学生 4 人（黄色チーム）、小学生チームと一緒に歩く保護者 1 人

【まち歩きの様子】

13：30　作戦会議では、それぞれのチームに分かれて作戦をたてる。赤チームは北側の狭い範囲を小学生が、南側の広い範囲を男子中学生が担当することにし、小学生は危ないのでみんなで行動することになった。大学生は一人ずつわかれて行動するようにしたようである。

13：45　小学生チームと共にまち歩きスタート。走ってはいけないというルールなので、かなりはや歩きで進む。すぐに旗をみつけると、エマージェンシーマークが入っており、

いったん本部に戻る。その後も小学生 3 人は足早に歩き続けた。子どもたちは、順番に旗をとることにしたらしく、次はあなたの番という感じで拾っていく。

地図を持っていないので、「この道までが範囲だったよね」とか、「まだこの道は行ってないよね」と確認しながら進むが、一体どの辺を歩いているのか、まったく検討がつかない。道は狭く複雑で、子どもたちも、完璧に道を知り尽くしているわけではなさそうであった。閉塞マンに出会うと、じゃんけんをしてお菓子をもらえる。小学生にとっては、これも楽しみの一つとなった。そこで、地図を見せてもらうと、「今ここだから、もっとこっちに行ってみよう」というふうに次の方向を決めていった。

途中で、エマージェンシー旗を 3 本ほど拾い、本部に帰るということを繰り返した。だいぶ旗を拾っていたが、みんなと比べていったいどの程度多くとっているのか、ぜんぜんわからない。他の黄色と青の旗が残っている場所で最初に赤の旗をとることも多く、「私たちは結構たくさんとっているよね。あとは中学生次第」と自信を持って歩いていた。

14：45　まち歩き終了。時間に遅れた場合は、点数にカウントしないというルールで、中学生男子がなかなかもどらなかったので、小学生チームはやきもきしていた。すべてのチームが帰ってきて、旗を本部に渡し、結果発表が行われるまちづくりハウスに向かう。

15：00　まちづくりハウスでは、国士舘大学の女子学生がおしるこをつくって待っていてくれた。寒い中歩き回った参加者やスタッフに振る舞われ、喜ばれた。

まちづくりハウスには、遊びとまち研究会のメンバーや、町会の防災担当者、太子堂出張所の職員も集合した。

結果が発表され、1 位は女子中学生チーム、2 位は男子中学生と小学生混合チーム、3 位が大学生チームとなった。それぞれのチームが順に前に出て工夫した点等を発表した。

企画者である饗庭先生から総括があり、「発災時に地元にいる中学生が、どのような役割を担えるのかという視点」についてコメントがあると、保護者からは、「保護者としては、中学生を（危ない中に）パトロールさせなければいけないのかなという印象は受ける」との率直な意見が出された。それに対して、「中学生を危ない中で見回りさせるということではなく、いろいろな可能性の中で、問題提起と受け取ってもらえばよい。そういうことを事前に地域で考えておいていただければ」と回答があった。町会の担当者からは、「とても参考になった。今後いろいろと考えていきたい」との意見が出された。

保育グループ　あそびの会
2013 年 3 月 12 日（火）14：00―16：00
場所：あそびの会
対象者：石川由喜夫さん（あそびの会園長）
（青少年太子堂地区委員会副委員長、太子堂小遊び場開放副委員長、太子堂 5 丁目町会厚生部長、世田谷警察少年補導員、消防団、昨年度までは体育指導員。1949 年 1 月 1 日生まれ 64 歳）

【地域での活動のきっかけ】
1980 年代初めに奥さんの実家である太子堂 5 丁目に住むようになって、専門家だということで、太子堂小の遊び場開放の指導員を頼まれて引き受けた。その後すぐに委員になった。委員長はずっと区議が担っていて、今は町会長が担っている。太子堂は小学校の校庭以外児童公園がないことから、遊び場開放がすごく重要だった。サッカーや野球チームに貸すだけではなく、野球は朝、サッカーは夕方というふうに割り振り、その他の時間は一般に開放して遊び場活動を行っていた。冬は夜が暗くなるので、そういう割り振りができなくなるから、夜間照明をつけてほしいということを要望して、議員と消防団が一緒になって、避難所になっているから、普通の電気系統以外で照明が必要ということを言ってつけてもらった。

【同時期かかわっていた活動】
その頃、三世代遊び場マップにもかかわっていた。あそびの会が当時は三軒茶屋にあったので、木下勇さん（千葉大学）を中心としたまち研（子どもの遊びと街研究会）に場所を貸したりしていた。三世代遊び場マップ作成には、石川さんの子どもたちが子ども世代、奥さんがその上の世代ということで、参加していた。
同時に大村虔一さんが提唱したプレーパーク運動があって、初めからかかわっていた。子ども関係、特に子どもの遊びの保障にかかわることに携わってきた。子どもの活動をずっとしてきた中で地域とつながってきた。
「あしたの日本を創る協会」というのがあって、そこで遊び場の研究をしていた。太子堂が大都市モデル、今の一関市の千厩町が農村モデルになった。田舎の子が都会に来る機会が少ないということで、この千厩の子たちを都会に呼ぶ「パルパル交流」という活動をずっとしてきた。今年で 29 年 57 回行っている。これは、三世代遊び場マップがトヨタの助成金をとった時に自分（石川さん）が代表になり、パルパル交流はニッセイの助成金で、N さんが代表になっていたのを、交代して責任を取ることにしたので、（石川さんは）パルパルのほうをずっとやってきた。現在、銀座商店街で、千厩の青空市などやっているが、もとはこの交流があったからで、行政の産業振興もからんで、今は大道芸にも出している。
同年代の児童館職員だった工藤恵子さん（中高生の居場所づくり）や沢畑勉さん（雑居

祭り）などと一緒に社会教育の研修の担当をして、一緒に、プレーリーダーの研修等を行った。そういうメンバーが同世代で、同時期にいろいろなことを始めていた。

農水省の寮の跡地を西太子堂児童公園にするという運動もあった。まち研で、三世代遊び場マップ作成が終わったころ、リアカーをつくって、いろいろな公園でプレーパーク活動を行ったりした。

太子堂小の運動場がアスファルトだったのをゴムにするという話があって、それはとんでもないということで、土にするという運動をしたりもした。

【青少年地区委員会や地域の活動】

地区委員会では 30 代前半で副会長になり、現在まで 25～30 年担っている。会長は町会の名誉職となっている。地区委員会の大きな行事は 4 つある。まず、7 月初旬に中学生と地域の人たちのボウリングがある。これは、20 年くらいやっている。

8 月末にはふれあいまつりがある。かつては、地区委員会が 30 万円くらいの予算でやぐらを組み、7 月末に盆踊りをしていた。これに、子どもたちはあんまり集まらず、踊りも踊らないので、何だという話になっていた。でも、つまらないからあたりまえだった。一方で、PTA の校外と緑陰子ども会がすいかわりをしていた。この二つの行事を 20 年前からくっつけて、現在のふれあいまつりの形態になった。最初から現在のように各町会に担当を割り振った。ふれあいまつりは 1,500 人程集まる。

12 月はおもちつきをしていたが、今年度から太子堂小学校の PTA 行事になった。2 月はマラソンを行っている。30 数年前、当時の校長が、学校でマラソンをやらせているが、発表の場がほしいということで打診があり、初めは遊び場開放主催で行った。

サバイバルキャンプは、もともと救急救命、普通救命はできるようになろうということで中学 3 年生を対象にやっていたのを、山﨑さん（太子堂 5 丁目町会長）が PTA 会長のときに、今のサバイバルキャンプの形態にした。

町会の子どもみこしも、今年 40 の息子が小さい頃、おみこしをやりたいということで、祭りに行くと、子どもでも大人と一緒の順路で大変だったので、子どもみこしをつくろうということを発案し、町会に成年部をつくって取り組んだ。幹部の中で、何人か話のわかる人がいて、はじめ赤半纏を 100 枚つくってくれて、山車をひいたりした。

【地域の状況】

石川さん世代より前の人は、町会も地元の人しかやっていなかった。太子堂七姓というくらいで、町会の幹部は地主さんばかりだった。それがちょうど地元の人だけでは立ち行かなくなってきた時期でもあった。太子堂 5 丁目町会は、早い時期に新しい人たちがやるようになった。石川さんは、サラリーマンではなくて時間があったというのもある。また、石川さんは奥さんのうちに同居していて、奥さんのお父さんはずっと地元だから、そういうことも地域にすんなり入れたことに関係している。はじめは、奥さんの旧姓で呼ばれた

りしていた。

【ご自身のこと】

家族は、奥様と実父。出身は浅草。小 4 まで日本橋にいた。それから杉並の高井戸に住んで、結婚して砧に住んでいた。若林の家庭幼稚園に勤めて、そこで奥様と出会う。

中学生のときから、社会事業大学に入ろうと思っていた。中学生のときに重症児にかかわるボランティアにかかわり、高校のときには、ボランティアを組織していた。ハンディキャップのある子に関心があった。幼稚園をやめてから、もっと小児から見たいということで、小児科医院の毛利子来さんのところで勉強させてもらった。当時は男性の保育者がいなかったので、男の人が保育をするのが必要ということを広めていかなければいけないという思いがあった。

子どもたちのおかれている状況が囲い込まれているので、その中では教育はできないという思いから、あそびの会の「歩いて、街で教育」という理念につながっている。これが間違っていなかったということが、子どもたちの活躍をみてわかった。苦労していることは、子どもたちの親の世代が変わってくるということ。親教育の仕方も、自分と今の親世代の中間の世代が言うほうが効き目がある。

学校教育でも、家庭教育でもできない、かつての社会教育が重要だと考えている。人間を育てていくのが社会教育。今でいう生涯教育だが、意味合いが変わってしまった。

2000 年から元世田谷区職員で社会教育をやってきた北口純さんたちと一緒に、知的障がい者のレクレーション活動を行う、NPO サーンズの活動をしている。毎月の歩行会や、サイクリング、ボウリング大会等を開催している。以前の職員は、行政マンとしてここまでというところ以外にも、自分の責任でやればいいだろという範囲でも活動をしていた。今はそうではない。われわれ団塊の世代は、全共闘の時代で、一度は変えようとしたのだから、生きてくために普通のことをしているけど、それだけでいいわけではないという負い目がある。

肩書きのソーシャル・ワーカーは、地域の中でいろんなことをコーディネートしていく役割という意味でずっと使っている。なんでも困ったら石川のところにいけばなんとかなるというような、相談が持ち込まれて、つなげる役割だと考えている。

青少年船橋地区委員会　「子どもぶんか村」
2012 年 11 月 29 日 9：00～10：30
場所：船橋まちづくりセンター
対象者：佐藤三智子さん（青少年船橋地区委員会会長）、宮幸朱美さん（同副会長）、大垣真理子さん（青少年委員）

【活動の成り立ち】

子どもぶんか村活動は 2004（平成 16）年 6 月に始めた。背景には、2002（平成 14）年 4 月から学校が週 5 日制になり、土曜日をどうするかということが問題になっていたことがある。当時、文部科学省が子どもを家庭・地域に返すということを打ち出していたこともあり、希望丘中、船橋中の校長から文化活動（船橋・希望丘地域青少年健全育成にかかわる新たな文化活動事業）をやろうという提案があり、やるなら担い手は青少年地区委員会しかないということになった。

すでに東深沢中学校には総合型地域スポーツクラブ「東深沢スポーツ・文化クラブ」があり、等々力コミュニティが中心になった運営をしていたので見学に行った。地区委員会の中でも、反対する人もいたが、とにかくやってみるしかないということで、メンバーそれぞれが「演劇ならできるかな」とか、「私は音楽かな」という感じで担当を分けた。希望丘中学の校長が、それより 1 年前に「まち探検くらぶ」をつくっており、船橋中学の校長はバイオリンができるのでオケをやりたいということで、「音楽くらぶ」の中に子どものオーケストラをつくった。

2000（平成 12）年から老人給食の後に喫茶店をひらいておもてなしをする「ひまわり」の活動が始まっていたので、この活動を引き継いで「ボランティアくらぶ」もできた。そのほかにも「演劇」「ものづくり」「伝統」の 6 つのくらぶがたちあがった。2 月に両校長の提案があってから、6 月には部員募集を行うという早業であった。

船橋中、希望丘中の音楽の先生が協力的だったのでコーラスはすぐにうまくいったが、オケは楽器も先生もどうしたらいいかと大変だった。バイオリンの先生はレッスン料が普通 30 分 5,000 円というような世界なのに、ボランティアでお願いするといっても「一体どうやって」という感じだった。楽器は、使っていない楽器を広報などで募集したが、結局修理費がかなりかかってしまった。地域にお住まいの山口先生（新日本フィルハーモニー管弦楽団名誉主席）が参加するようになって、お弟子さんたちを紹介してくれるようになり、また、世田谷フィルハーモニー管弦楽団の協力もあって、今はスムーズにできている。このように、はじめは手探りでも、形が出来上がってくると手伝ってくれる人はいるということである。

【活動の担い手】

活動の主体は青少年地区委員が担っており、協力委員も何人かいる。子どもぶんか村の

ような活動は、この地区委員会という組織でやるのが一番いいと思っている。地区委員会には、PTA から入る人もいれば、校長先生も必ず入っているし、町会からの推薦でも入っている。いろんな人がかかわっていることもいいところであるし、さらに、PTA の人たちは必ず 1 年で変わっていくから、メンバーが固定されないところがよい。PTA でかかわる人は、任期の間しっかりがんばってくれる。今の PTA の人たちは非常に優秀で、自分の子どもがぶんか村に参加しているからと手を上げて係になってくれる人もいる。中には、PTA 卒業後もかかわってくれる人もいる。子どもに携わる人だから、誰でもいいわけではなく、一番は子どもが好きなこと、地域の中でせめて住所と名前がわかる人にお願いしたいと思っている。

【参加者】

小中学生対象で、参加者ののべ人数は 220 人となっている。運営主体が地区委員会なので、船橋地区の子が対象だが、他地区の子が来ても拒んではいない。ジュニアオーケストラなどは1／3 は地域外の子が参加している。高校生や大学生も続けたい子は続けているが、卒業しても何かのときには手伝ってくれる。音楽くらぶでは、高校生でコンサートに出る子もまれにいるが、コンサートや発表会の司会など手伝いを頼むと引き受けてくれる。でも基本的には、高校生、大学生の子たちには、この活動にとどまらずに羽ばたいていってほしいと考えている。ぶんか村はあくまでも入り口であり、入り口は平等にしたいということが活動の根底にある。そのため、活動自体も完璧を目指すのではなく、誰でも入れるようにというところに重点を置いている。そういう意味では、お稽古事とは違っている。講師の先生たちはどうしても要求が高くなるが、私たちはあまりそうならないように気を配っている。

【くらぶの事例】

〔映像くらぶ〕

去年は中学校の統廃合があったのでメモリアル映像を作った。中学生の授業風景を中学生は撮れないから、試験休み中の高校生が来て撮ったりした。 ぶんか村の映像くらぶでは、プロが教えてくれるので、要求されるレベルも高い。子どもたちがここを卒業して高校の部活で映像部に入っても、教えてくれる人が素人の先生だったり、先輩だったりするので、満足いかないということもあるくらいで、「〇〇〇の機材もないんだよ」なんて言っている。今年も高校生たちが続けて来たいということだったが、中学生の子どもの応募が 2 名だったので、今は休部状態となっている。

〔音楽くらぶ〕

ジュニアオーケストラのメンバーは、小学生 26 人、中学生 14 人、高校生 1 人、大学生 1 人で、講師が 16 名である。毎月第 1・第 3 土曜日の午前中に希望丘小学校で活動してい

る。楽器は無料で貸し出しているので、持ち帰って練習できる。世田谷フィルのメンバーでもある船橋希望中学校の音楽の先生も講師として参加してくれている。

ジュニアコーラスのメンバーは小学生 9 人、中学生 13 人、高校生 4 人、講師が 3 人である。毎月第 1 土曜日に船橋小学校で活動している。中心となる先生は大阪から来てくださり、先生と子どもたちが楽しくやりとりしながら、しっかりと練習をつんでいる。小学生たちも小学校はばらばらだが、小さな子も大きな子も仲よく練習している。

【多団体との連携】

毎年 3 月に行っている「子どもぶんか村発表会」は実行委員会形式で行っているので、町会なども入ってもらい、一緒に開催している。そのほかにも、町会は回覧板やミニコミ誌などで PR をしてくれている。もともと、地区委員会には PTA も町会も入っているので、連携しやすい。実行委員会には入っていないが、発表会のときは、管内の小・中学校のおやじの会も手伝ってくれる。

【学校との連携】

学校では、校長先生に異動があってもぶんか村はこの地域の特徴だと捉えてくれている。HP に載せてくれたり、普段から地域の特徴ということで紹介してくれている。学校の中で参加者が少ないことを伝えると、「うちの学校は参加者が少ない」と朝会で言ってくれたりしている。学校の先生は入れ替わるが、今年は図工の先生が「ものづくりくらぶ」の講師を引き受けてくれている。音楽くらぶは船橋希望中の音楽の先生が手伝ってくれている。

クラブに来る子には家庭の問題を抱えている子、発達障がいの子などもいるので、学校との連携は重要だが、学校も守秘義務があるのでなかなか相談し合うのは難しい。そういうなかで、地区委員会には現役の PTA や PTA 会長も入っているので、学校とある程度の情報交換はできるようになってきている。

【保護者とのかかわり】

親御さんも、皆さんが協力的なわけではない。子どもが入っているから何かできることがあればという人もいるし、習い事みたいに連れてきておいていけばいいみたいな人もいる。最近は、「保護者の方はお手伝いをお願いします」ということで、保護者もかかわるんだということは定着してきた。だから、それがいやだから入らないという人もいる。子どもが入りたくても、親がだめという子もいる。学校の部活とか、生徒会とかは内申にもメリットがあるが、勉強以外で楽しそうにしていると、遊んでいないで勉強しなさいというふうに考える親も多い。面接で、地域活動をやっていたと主張してプラスになったという子もいたのだが、親にとって、メリットが見えないというのがあるのかもしれない。

こちらとしては、輪の中に入れない子でも、それでもいいんだという気持ちでやっている。そういう子の親御さんは様子を見に来て、やめますというが、続けてもらえるように

説得する。過去に映像くらぶで発達障がいがある子がいて、その子も途中でクラブをやめるといったときもあったが、何とか最後まで続けて、最後は本当に感動した。親にとって、ぶんか村は子どもが成長する場だということを発信していきたい。どんな子でも参加できるように、学校と親をつなげていければいいと思う。

【運営上の問題点】

一番は運営費の問題。最初は区が 80 万円くらいずつ 3 年間助成してくれた。部費を集めているが、部費は先生の交通費とか会議費に使っている。助成金は飲食に使えないので活動が昼をはさむ場合は先生のお昼代などにあてることもある。発表会は実行委員会形式にして、区の地域の絆推進事業の助成金をもらっている。国の「子どもゆめ基金」ももらっていたが、今年からきられてしまった。そのため、今まで 1,000 円でも心ばかりの謝礼を先生に出せていたのが、来年から出せなくなる。ほとんどボランティアなのだが、1,000 円でも謝礼があるとないとでは違う。玉川の花火のときに屋台を出して資金を稼ごうと思ったが赤字になってしまった。

地区委員会の予算が全体で 58 万円あり、3 部会で分けている。3 部会のうちでは多めにもらっているとはいえ、とても足りない。オーケストラでコンサートをやるのでも、楽器を運ぶだけで 3 万円とか 5 万円とかかかるから、予算の問題は深刻である。

助成金をとるのにも、それぞれ決まりがあるから合わせるのも骨が折れる。助成金専門に人がいるところもあるらしいが、自分たちでやっているから、申請するのも大変である。

場所の問題は、学校が協力してくれているので問題はないが、使用する前に何時から何時まで借りるということを申請しておかなければいけない。映像くらぶなどの例でいうと、時間があったから集まって、集まったら作業してみたいなことができない。子どもがふらっと集まれる場所がない。特に中学生はそうなってしまう。家で集まったりはしているが、拠点となる場所があれば、印刷機もおけるしいいと思う。まあそれはそれで、子どもたちが集まる日にいつでも出てこなきゃいけないとなるからまた大変になるが。

【今後の活動】

2000 年からやってきたひまわりの活動も、土曜日の学校の授業が始まってできなくなってしまった。このように、周りの状況が変わればクラブの位置づけも変わる。土曜日が休みではなくなって、たとえば日曜日にしようとか、そうまでしてもうやらなくてもいいかというのもある。かかわっている人たちがやめるといえば終わってしまう活動であり、ずっとあるということが前提なわけではない。

映像、演劇、まち探検も今年は人が集まらず、休部中となっている。演劇部は何人かやるという子が出てきたので、発表会に向けて再開した。その中で、「ちはやふる」という漫画で百人一首かるたが人気となり、かるた会が増えたという変化もある。

活動のやりがいは、なんといっても、お子さんとのかかわりが一番である。子どもたち

の成長をみると、やってよかったと思う。年度末にもうやめようと思っていても、3 月に発表会を見ると感動して、また続けてしまう。

【地域活動にかかわるようになったきっかけ】

ぶんか村にかかわっているのは、船橋児童館の幼児サークルの仲間が多い。その後も、PTA 活動を一緒にやったりしていた。まずは佐藤さんが別の縁で地区委員会に入ったが、その後、「あなたどう？」という感じで、仲間の中で 10 人くらいは順にかかわっている。子どもとのかかわりの延長線上に地区委員会があっただけで、地域活動とか、ボランティアという意識は全然なかった。「何か一緒にやる？」みたいな感じで、楽しいことをやっているという気持ちでかかわっている。そこにぶんか村活動もある。

学校も地域に開こうという時代だったということも大きいと思う。そこに、何かやろうという若い世代の人たちがいた。そういう人たちがいたことには、前地区委員会会長の駒井さんが作った雰囲気が大きい。町会の人たちに、「地区委員会には若い人を出しなさい」ということを言ってくれていた。児童館の活動で、すでに地域と出会っていたということもある。

【他の地区や地区内への影響】

他の地区委員会でも、こういった活動をしようという気持ちがないわけではないと思うが、高齢の方が始めるのは難しいのではないか。それは、自分の子どもがしたいというところから入るということが大きいからである。いざ、やろうとするならば、先頭にたってやる人が 3 人いればできる。はじめてみると手伝ってくれる人はいる。東深沢でそういうふうに言われて「ほんとに？」と思ったけど、本当だった。世田谷は人材の宝庫だと思う。

地区委員会の人たちは町会に引っ張られる。地域の中で地区委員会は、自分たちでは見つけられなかった人材の宝庫だと思われている。民生・児童委員とかも頼まれる。船橋会などは特に活性化している。これも、地区委員会は常に新しい人材が入れ替わる PTA の母体があるからというのが大きい。

そういう中で、地区委員会には可能性があるということを一番言いたい。NPO にしてしまっては、人材が固定してしまうからだめだと思っている。子どものことだから、常に子どもの親が入ってくるようでなければだめで、それには地区委員会が一番適している。でも、活動量にかかわらず地区委員会の中で委託料金一律ということには問題がある。

今はこうしてぶんか村の活動がいろいろと取り上げられているが、私たちはただのお母さんたちで、地味に活動をコツコツやってきただけ。どの地区でも、誰でもやってみればできるということは言いたい。

ルポルタージュ　子どもぶんか村音楽くらぶコンサート

第 4 回目の子どもぶんか村音楽くらぶコンサートが 2012 年 12 月 16 日（日）に成城ホールで開催された。子どもぶんか村音楽くらぶのジュニアコーラス、ジュニアオーケストラと友情出演で船橋希望中学校吹奏楽部の演奏が行われた。9：00 から 13：00 の間には、当日のリハーサルが熱心に行われていた。子どもたちは緊張した面持ちであったが、先生たちがたくみに緊張をほぐし、時には楽しい雰囲気をつくり、時には厳しく子どもたちを場に慣れさせていった。リハーサルの舞台に出てきたときにはこわばっていた顔も、先生たちの指導の下で、肩の力が抜けていき、楽しく演奏する姿にかわっていった。

リハーサルの進行、本番の司会、機材の出し入れ、受付など、裏方全般を青少年地区委員会や保護者の方々が担当し、子どもの発表を支えていた。

13：00 に開場されると、子どもたちの保護者が続々と会場に入り、ほとんど満席の状態となった。私の隣の席では、地域の方が、「主催者がきちんと音源をとってないらしいから、きちんととってあげようと思って」とプロ仕様の機材で録音していた。

13：30 に開演となり、青少年地区委員会の会長、砧総合支所の副支所長、希望丘小学校の校長から順次あいさつがあり、いよいよジュニアコーラスの公演がはじまった。前列に小学生が、後列に中学生が立ち、堂々と全 8 曲を歌い上げた。リハで、先生から「リハの状態で伴奏を入れるかアカペラでいくかを決める」といわれ、アカペラでいくことになった曲も自信を持って歌っていた。「あなたたちは、本番に強い」と言われていたとおりに、非常に感動的な合唱であった。

ジュニアコーラス演奏の様子

続いて友情出演の船橋希望中学校吹奏楽部の演奏である。指揮はジュニアオーケストラと同じ先生であった。クリスマスソング・メドレーや流行の曲など 4 曲を演奏し、大変盛り上がった。

休憩中に、ジュニアコーラスに参加していた男子中学生に話しを聞いたところ、中学校では、水泳部に入っているが「部活よりこっちのほうが楽しい」とのことであった。

ジュニアオーケストラ演奏の様子

休憩をはさんで、ジュニアオーケストラの演奏が始まる。今年は、パートごとの演奏を試みたということで、まずは打楽器のメンバーが登場し、ボディーパーカッションを披露した。続いて、金管楽器、木管楽器、弦楽器と順に演奏していき、順に席につく。最後は全員で合奏となり、「きらきら星変奏曲」「ト

リッチトラッチポルカ」の 2 曲を演奏した。月に何度かの練習で、講師や世話人はボランティアで行い、この 5 月に入った小さな小学生もいる中で、こんなにすばらしい演奏ができるのかと心を動かされた。演奏は決して完璧ではないのであろうが、さまざまな人たちのかかわりで、子どもたちが生き生きと難しい楽器を弾き、それが一つの音楽になる。オーケストラという形式のせいもあるかもしれないが、人と人との協働によって奏でられた音楽によって、会場全体が一つになったようで非常に感動的である。

最後の船橋希望中学校校長のあいさつでは、「（地域で行っている）こういった活動は、つくるのは大変だが、なくすのはあっという間である。続いていくように考えていかなければいけない」と述べられていた。

希望丘小学校避難所運営委員会
2012 年 11 月 29 日 10：30～12：00
場所：船橋まちづくりセンター
対象者：駒井澄子さん（希望丘小学校避難所運営委員会委員長）、宮幸朱美さん（同副委員長）、舘脇合子さん（希望丘小学校 PTA 会長）

【活動の成り立ち】

希望丘小学校避難所運営委員会は 2004（平成 16）年 7 月に立ち上げた。運営委員会が立ち上がってすぐに委員が学校体育館で宿泊体験をし、その後夏と冬ではどのように状況が違うのかということを知るために、2 年続けて夏冬泊まってみたという経緯がある。

1995（平成 7）年に阪神・淡路大震災があり、千歳船橋駅前や希望丘小学校区域内にも少し密集地域があるため、地区町連でもどうしたらいいのか話が出ていた。2004 年に区から小中学校を避難所にするという話が来たときに、区に申し入れて、船橋地区は小・中学校ごとに町会・自治会の担当を決めることになった。駒井さんとしては、阪神の震災後にまちづくりファンドをとって視察に行った経験などから、避難所にはトイレが 1F にしかなく、障がいがある人や高齢者は行ったりきたりできないので上の階での生活は無理だということを実感していた。そのため、小学校の 1，2 階はこの町会、3，4 階はこの町会というような振り分けでは避難所運営は成り立たないと考えたからである。

その結果、フレール西経堂自治会が希望丘小学校の担当になった。フレール西経堂は 1995 年に建替えをしており、大きな地震でもまず大丈夫だろうということから、実際に避難してくる人はどのような人びとであるのかを考え、子どもたちが行きなれた学校に避難してくるものと想定し、町会ごとよりも学区単位で考えて運営を行っている。そのため、日赤や民生委員にも希望小の担当を決めてもらうなどしている。

とにかく、子どもの授業再開を第一とし、第二は混乱を起こさないような体制をとるということで、PTA、地域の方たち、フレール西経堂の役員を入れた避難所運営委員会をつくりたいという思いがあった。

【メンバー】

中心となるのはフレール西経堂自治会会長の駒井さんと校長先生の 2 本軸で、フレール西経堂自治会の役員、PTA 会長と校外役員、PTA の OB、遊び場開放委員[9]が入っている。ほかには、地域の近隣の人で、日赤、民生委員などが入っており、40 人くらいが委員になっている。遊び場開放委員は普段の活動からなべなどの機材を持っており、それらの経験は災害時にも強いと考えられるため、入ってもらっている。

---

[9] 遊び場開放委員のメンバーは、PTA とは別であるが、現役の PTA も入っている。遊び場には校外委員も参加するので、メンバーの入れ代わりがある。

委員会は年に 3，4 回行っており、基本的には行事の前に必ず行う。委員会の前に校長、副校長、PTA 会長、校外委員、遊び場開放委員、青少年委員のメンバーで本部会を行っている。引継ぎがスムーズにできるように、新旧の委員がメンバーになっている。避難所運営における課題などは、そのつど本部会で話し合い、運営委員会の議題にしている。

立ち上げから 3 年間、運営委員で防災館の見学に行くなど、自分たちで課題を見つけられるよう知識の共有に努めてきた。そのほかにも、当初から運営委員会主催で給水訓練を行ってきたが、今年から授業の中に取り入れられるなど、成果は上がっている。

避難所運営の役割分担の中でリーダーになる人をつくろうということで、2 年前からリーダー研修を行っている。いろいろな機材の設置など、訓練時は業者の人にお願いしているが、発災時には業者の人はいないのだから、自分たちでできるようにしようという試みである。マンホールトイレの組み立てや、バーナーのつけ方などをリーダーの人たちが実際にやってみる。訓練では役割分担しているが、その人が必ず来られるとは限らないので、他の役割の部分もリーダーは知っているようになるという狙いもある。このように、避難所は、誰かをこの役割に定着させるというのは無理であり、いろんな人がかかわるようにしないと実際には役立たない。

【避難所運営訓練について】

今年の 7 月に 10 回目の避難所宿泊体験訓練を行った。年 2 回やった年もあれば、いつも参加者が一緒だからということで、2010（平成 22）年には宿泊をやめ、日帰り訓練をしてみたときもあった。しかし、東日本大震災があり、何度でも体に覚えこませることが大事だということを改めて思った。今年は希望丘小学校の避難所訓練を砧地域内の各避難所訓練に先がけて行ってほしいという依頼が行政からあったので、いつも 10 月にやっているところを 7 月に行った。

訓練では実際の場面を考えて、親と一緒に子どもにも参加してもらっている。実際に泊まってみると、床にじかはいやだということになり、ブルーシートを敷くことになった。ブルーシートに 4 人家族を基準とした広さを 1 区画として通路を確保したラインを書きこみ、体育館に敷き詰めた。そうしてみて、この学校は 200 人くらいしか受け入れられないということを確認した。このことから考えると、発災時には、何千人なのか何百人なのか、実際何人来るかわからないが、落ち着いてきたら、順次第二避難所や町会設置の避難所など、その他の施設に移動してもらわなければならないということを認識しておかなければいけない。

授業再開が第一なので、教室は使わないことを前提に運営している。そのほかにも校庭への車の乗り入れやテントを勝手に張るなども禁止というルールにしている。ペット（犬・猫など）の受け入れなどのルールもすでに話し合って決めている。避難所でどんなことがあろうと、ぱっと対応できるような体制にしている。PTA や地域の方々などに、それぞれの役割の中で気づいたことを建設的な意見としてそのつど出してもらっている。避難所運

営委員会発足後に学校協議会により作成されたマニュアルがあるが、机上の空論になってしまっていて、実際には想定と現実はぜんぜん違うということが訓練からわかってくる。

実際に避難所が立ち上がったら、家族がいろんなところから安否確認してくることが予想されるため、受付をきちっとするということを徹底している。そうしておけば発災から 3 日程度あとに来るであろう公助にスムーズに引き渡すことができる。学校に集まってくる児童の顔を一番知っている PTA と、地域の人たちの顔を一番知っている自治会の人たちで受付を担当している。このように、訓練では現状に即した役割分担をしており、各部署の人は自立して自分で考えて行動している。しかしながら、十分に訓練していても、委員が必ず来られるとは限らないということを念頭に置き、避難してきた人の中からも運営にかかわってもらうように働きかけたいと思っている。そういう意味では、避難所運営の委員は指示をする役割に徹するほうがいいと思っている。発災時に運営ができるようなお膳立てをする係という認識でいる。実際には自分の身は自分で守るということが一番大事である。

訓練は経験することで自己の備えを啓発することも目的のひとつである。「こんなところで、何日も過ごすのはいやだ」ということを実感してもらって、ここに来ないようにするために、避難しなくていいように準備を促すことも大事な役目だと考えている。自助が一番重要で、水などの備蓄もしてもらい、自分で歩いていけるなら、給水所にとりに行ってくださいというスタンスである。あくまでも、避難所の備蓄は赤ちゃんや高齢者など、自助できない人のためものという考えである。

基本は自助という考え方が根底となっているので、前回の訓練ではお互いの非常袋の中身を確認しようということで、みんなで持ち寄ったが、中を見合うところまではできなかったので次回はぜひやりたい。

今年は医師と連携して医療救護所訓練を行った。砧地域のモデル地区となり、先進事例になるということで、医師会も協力してくれた。

【希望丘小学校避難所運営の特徴】

避難所運営の重要事項としていることは、第 1 に授業の再開、第 2 に弱者の受け入れ、第 3 に第二避難場所への引継ぎである。これらを一貫して目指してやっている。

実際の発災時にはまずは誰でも引き受け、一般の人も十分に受け入れる体制をとる。その後で、それぞれ第二避難所に向かうように誘導する。しかしながら、基本は自助であり、自助の部分の徹底をしてもらうことが重要である。

他の避難所と違うところは、中心となる組織の中に青少年委員・PTA が入って活躍しているということである。町会中心の避難所運営だと、運営側に高齢者が多いため、発災時に即戦力にはなり得ないのではないだろうか。その点で、防災訓練と避難所運営は異なるということを自覚しなければいけない。青少年委員は遊び場開放委員とも PTA とも精通していて、連携できるからよい。

【他団体とのネットワーク】

障がい者の団体にも声をかけて一緒に訓練を行った。聴覚障がいのある人などは、大きな声で言っても聞こえないから、入り口に看板を出しておいてほしいというふうに団体の担当者に言われたが、「災害時は停電していたりして、見えませんよ」と言った。すると、担当者ははっとしていた。やってみたり、話してみたりすることで、お互いに気がついていなかったことに気がつくということである。一次避難所として障がいを持つ方など様々な人を受け入れる必要があるが、立場が異なる人も自助が必要ということに変わりはない。支援団体にも参加してもらい各団体としてどうするか考えてもらうきっかけになればよいと思う。

今年は、医療の関係者を交えて訓練を行ったが、医療救護所としての備蓄なども、区の担当者と医師では、必要なものの認識に大きな食い違いがあった。何事も体験してみて初めてわかるということがあるので、訓練をもとに要望書を毎年のように区に提出している。

【ご自身と地域活動とのかかわりについて】

駒井さんが 1959（昭和 34）年に今の集合住宅に初めて来たころ、隣近所の結びつきが少なかった。共働きの世帯が多かったが保育所が足りなかったので、団地で自治会の保育所をつくることになり、その活動に参加した。保育所は 10 年間続いた。それと同時に自治会の活動もやっていた。保育園が児童館になるということになり、土地と建物を無償提供し、1972（昭和 47）年に児童館ができ、自治会として児童館にも協力した。そのなかに子どものネグレクトなどに関して熱心に取り組む職員がいて、児童館では週 2 回夕食を作る活動をしていた。そのようなことから、児童館が子どもの居場所になった。そういう活動に、普通のお母さんたちも手伝ってくれるようになった。1974（昭和 49）年には、初代の青少年委員になり、1975（昭和 50）年に PTA と児童館と一緒になって、希望丘小学校遊び場開放をつくった。その時には、学校側を説得し校庭で飯ごう炊飯を実施するなどした。希望丘小学校では、PTA 会長を 1 年間やった経験もあり、その後遊び場開放の活動もやってきた。それらが、今の避難所運営の活動につながっている。宮幸さんも希望丘小学校の PTA 会長を経験し、昨年度まで 5 代目の青少年委員を担っていた。

舘脇さんは 2 年前に引っ越してきて、今年 PTA 会長になったばかりである。希望丘小学校に通うのは現在 140 世帯だが、今は働いている人がほとんどである。その中で、保護者は子どものためだと学校に来るし、子どものためにいい方向に行くなら協力するという意識を持っている。